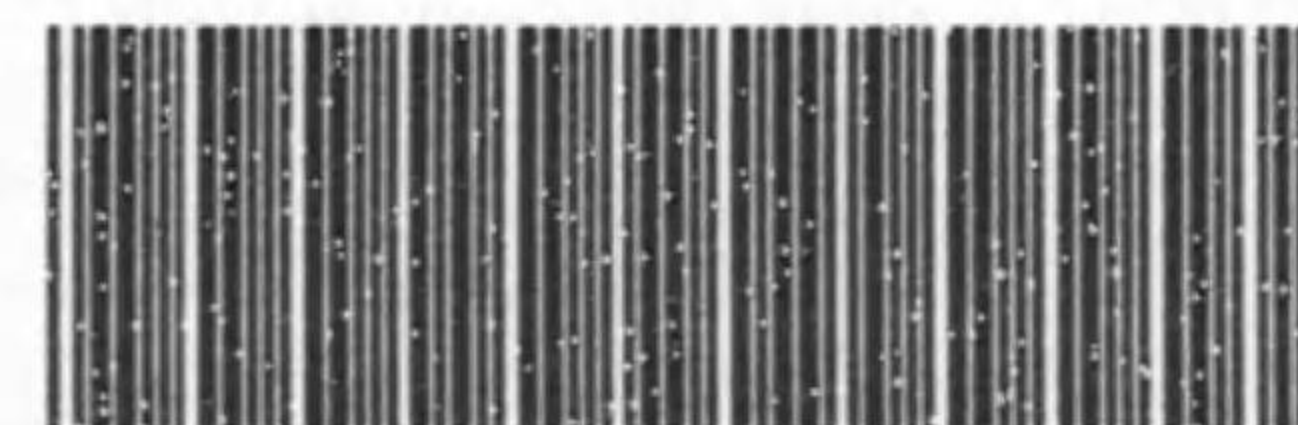


259

864

青年のために



0040748000

3

0040748-000

259-864

師弟について

羽磯武平・著

昭和書房

昭和18

AHA

この著作物は、著作権者不明のため、著作権
第67条の規定に基づき、平成12年5月1
付けで文化庁長官の裁定を受け使用するもの

師弟について

青年のために

羽磯武平

昭和書房

325

青年のために

羽磯武平著

師弟について

昭和書房



はし が き

吾々は運命の兒であるとはよくいはれてゐるところである。吾々は生れながらにして、遺傳と環境との制約を多分にうける。即ち、性格才能はもとより種々の社會的條件を一應あたへられたものとして受けつぎ、そのうちに生活せざるを得ない。併しながら、運命をただ運命として、自らの目的と意志とを働かせようとならないならば、そしてまたその餘地がないものであるならば、それこそ人生は宿命的なものとなり暗黒なものとなつて仕舞ふ。

吾々は運命を諦観して、徒らに笑つて過したり泣いて去るやうな意氣地なさであつてはならぬ。所與の條件より發足して、自分の目的なり、負荷されてゐる國家の使命なりを、切り開き創造してゆくところに人間活動の眞意義があり、國民

として進むべき道があると思ふのである。環境に育たざるを得ない吾々は、一刻も早く受動的な存在から目的意志的の境涯に入らなければならぬ。このことを力づよく自覺せしめるものが教育であると思ふのである。

時局下日本の教育使命は益々重大となり、種々の對策が講ぜられてゐるが、教育の根基は、どこまでも師弟の問題であると思はれる。

師弟の縁と爾後の交流は、教育者にあつては最大の責務であり、子弟にとつては實に一大事である。師弟交流の重點は知的技術的指導にあること勿論であるが、それにもまして健實豪毅なる精神的交流の必要が痛感せられる。

本書はかゝる意圖のもとに構成されたものであるが、もつばら手近かな資料によつてその間に於ける師弟の關係を、私の學生生活を省みつゝ、かつまた學生に接しつゝ、整理した師弟についての一考察にすぎないものである。而も、この整理のことすら必ずしも系統づけられてはゐない。これは一に私の淺學のためである。

るが、また真劍なる師弟交流の感銘をそのまま述べるよりはかなかつたためでもある。ある。

かへりみて意ながく筆の足らぬことを痛感してゐる次第である。それにも拘らず、あへて世にとふ所以は、これを機會に先輩諸兄の御叱正を得て今後の研鑽の一助にしたいとの私の切ない念願からである。

終りにのぞんで、本書の周旋の勞をとられた同僚の原實君、多くの示唆を與へてくれた同行の小玉治義君、並に一一の掲載は割愛するが、参考にした幾多の書誌の著者に對して心から感謝の意を表する次第である。

昭和十八年三月十五日

著

者

師弟について 目次

第一章 師弟について……………(三)

- 一、青年と教育の場……………(四)
- 二、師弟の縁とその交流……………(一八)
- 三、師に望む……………(三三)
- 四、學生に求む……………(四三)
- 五、結　　び……………(五一)

第二章 孔門師弟の道……………(五)

- 一、儒教と日本の精神的準備……………(五六)
- 二、師弟の愛情……………(七三)

三、適性即妙の教育	……………	(八七)
四、實力の養成	……………	(一〇八)
五、孔子の宗教思想	……………	(一二六)
第三章 先生としての乃木大將	……………	(一三三)
一、學習院々長の拜命	……………	(一三四)
二、院長就任と内外の不滿	……………	(一三二)
三、大將は文人たらんとす	……………	(一三四)
四、大將の教育精神	……………	(一六〇)
五、明治天皇崩御の前後	……………	(一八七)
餘論——職域偶言	……………	(一九三)

師弟について



第一章 師弟について

一、青年と教育の場

青年は、傳承のうちに形成されてゆくものである。自己を形成し、創造してゆく自らの力を、有するものである。いまだ、認識経験しない世界に對しては、無限の好奇心と魅力をもつてゐる。そして、その實現の意欲は極めて旺盛である。これらの特性及び意欲の集積するところは、青年を自覺へと導くのである。自覺は、驅つて反省を促すに至る。反省は、再び自覺を意識せしめて、將來への希望と湧心とを、喚起するのである。

かくして、國家に對する責任と使命とを感じて、雄々しく健朗な人世の出發に立つのである。

人は誰でも、理想をもつてゐる。理想は求めて得ざる空想とは自ら異なる。人は、理想の實現を念願として、努力するものである。理想の實現は、自覺を前提とするものである。理想は、確乎とした自覺の上に立脚して、熱烈眞剣な態度のもとに、方向づけられた時に於てのみ、實現性を有するのである。理想の具現化されたものが、現實の生活であり、世界なのである。

この精神過程は、人間生活發展の理趣であるが、遠大なる理想と、その實現の意欲と追求の過程とは、青年の特質といふべきであらう。この意味に於て國家の運命は、常に國民の一人に宿る精神にある。一國の盛衰は、常に明日を背負ふ青年の双肩にかゝるものであると、心ある史家が指摘しました警告を發してゐるのは、尊敬すべき論である。史實は、切々として、私共に迫つてゐる。現下の世界各國は、その再出發をば、必ず青年に求めてゐるではないか。

青年は、かゝる意味に於て、解されねばならぬと思ふ。

しばらく、青年の特質について、論を進めたい。青年は、既に固つた器ではな

い。器材形成の過程にあるものである。指導と研鑽の如何によつては、方圓の器ともなるし、規矩の定ともなるものである。青年の性格は、恰も、水のやうである。晝夜の別なく、滾々として流れ、その止まるところを知らぬ、自然の力を有する。その勢の向ふところは、懸河ともなり、深淵ともなる。靜かなる水がすべてを浮べるやうに、包容性を有するかと思へば、狂亂して岩をもかむやうに、逆性を發揮することもある。また、状況によつては、清澄にして月をも宿すやうな、純真性をあらはすかと思れば、濁水混沌として、收拾し得ないやうな相をも、露呈することがある。

別の言葉を以て言へば、青年は、極めて多能的な存在である。たのむべきは青年であり、恐るべきも青年である。

多能的な性格は、模倣的となるものである。先人社會の様相は、ただちに眞似て、自己の身にこれを移したがるものである。好奇の事象は、批判や検討の餘裕

もなく、ただ一途にこれを模倣しようとする傾向がとくに強い。

この多能性と模倣性とを、青年の二大特徴として、私は規定したのである。そしてまた、この青年の特性は、よく青年を同化的な存在とするものである。古語にも、朱に交れば、赤くなるとある。青年を水にたとへたが、水が一切を包容するやうに、また穴にみたして、のこすところなく進むやうに、青年は凡てを吸収し、凡てを發散する性格を、多分に持つてゐると思はれる。そしてこのことはその自然性に基くところが強い。従つて、生活そのものゝ價值とか、實在の意義については、充分な考慮を拂ふ素地も、心構へもなく、直接的な行動が、生活を支配する傾向にあるといへよう。

然し、年齢の進むに従つて、青年としての自覺も確立して、思考の力も養はれてくるが、また、その方向に直進することができないものである。それは從來の自然的な慣習による行動と、新しい自覺による行動精神とが、必ずしも一致した

方向をとらぬからである。

このことは、青年に限られた問題ではなくて、人のひとしく體驗するところであるが、青年には特に思想と行動との分裂不統一の状態を強く感ずる、純真さがある。

青年は、この交錯下にあつて、自己の運命を開拓しようと、考へはじめ。この相剋のうちに、青年は自己への信頼と、懷疑とを感ずるものである。この故に青年は、責任と使命感によつて、本來の希望に輝く價値の實現への地盤にも立つが、障礙のうちに、悩み苦しむ場合もある。

學生の場合には、更に別な面がある。學生は、自らの經濟生活を營むものではない。従つて、社會的制約等に拘束されることが、甚少である。學生は、家に寄食して、一定の職業をもつてゐないから、時閑をもつてゐる。學窓に於ては、將來の指導者として、専ら思考推理の訓練や、意志の鍛錬につとめつゝあるが、現

實の生活と遊離してゐるので、思想と行動の分裂し易い状況下にある。そして、このことは世間の注意を惹く。別社會に對する好意であるのか、中傷であるのか、何れにせよ、最近の學生生活に向けられた非難は、一にこゝにあつたと、いひ得るであらう。

更に、青年は生理的には、力の象徴であるし、精神的には、若さの持主である。若さの有する力は、發散を求めて止まぬものである。然し、その發動の方法と機會とに、不充分的憾みがあるといへよう。

青年の特質については、語るべき多くのものがあらうが、要するに、青年とは修練過程にあるものである。このことは、青年も社會も、自明の理として、疑はぬところである。この修練過程にある青年の必然的な發展力は、意識的に、合目的に、方向づけられぬばならぬ。こゝに、教育と指導の意義もあるのである。

既に述べたやうに、青年は模倣性に富んでゐる。そして、この性向は、少年に

一層強いのである。この時代の一切のものは、模倣からはじまるといふも決して過言ではないと思はれる。

模倣の場を提供するものに、種々のものがある。一般には社會と文化財と個人とが、教育の三主體として、重要性を有するものとしてあげられてゐるが、これまた、模倣の場としての存在である。

人は誰でも、生れて先づ家庭の人となる。そして、郷土に育ち、學校に學んで社會國家の一員として、生活するものである。これらのものは夫々の意味に於ける社會を形成してゐる。その社會の特有する、組織や制度や慣習は、模倣性の強い青少年に、重大な影響と感化とを與へる。環境力といふべきものであつて、教育の場として、重大視されるものである。

或る權威ある教育經驗者が述べてゐる。兒童が、學齡期より十一二歳迄の間、この間に日本人ならば、日本的なるものが、自己意識の内に、浸潤するときであ

る。例へば、米國に育つたならば、最早日本人たり得ず、逆に日本で育てられるならば、永久に日本人として留る。即ち家の生活や周圍の情況、交友の關係が、自らその人を訓致する時期であつて、この間にては、學校教師がよしまづくとも、大した影響がないと、環境の絶對的支配力を強張してゐる。孟母の三遷は、よい實例である。

文化財とは、書物をはじめ、繪畫、彫刻、音樂等の謂である。これらのものは、その選擇と趣向とに任せて、教育にあたつてゐる。

最後に、個人とは相互に人格的接合をなすものであり、また社會を構成し、文化財を創作してゐるのも個人である。このやうな立場にある個々人の、教育的役割の重大なることは、いふまでもなからう。

學校は、特殊な教育社會である。學校に於ては、あらゆる條件を、教育的に整理するのである。人も物も教育的に結びつけて、學ぶものと教育擔當者とが、相

互緊張の状態に、おかれてゐるのである。従つて、學校とは無意識的な教育主體ではなく、學校そのものに具有する力と、學生自らの發展しようとする力とが、全體的統一に於て、意識的に働き合ふ教育の場である。

學校には、學校それ自身の傳統と校風といふものがある。校舎をはじめ、圖書館や研究所や、其他厚生施設等の具體的財がある。學校の運営を司る教育行政者があり、更に直接、學生の指導に當る教師がある。

學校の傳統は、創立精神であり、創立者の遺鉢である。校風は、傳統の現實面である。慶應義塾には、慶應の傳統があり、早稻田には、早稻田の校風がある。

新しい日本の建設は、文明開化より始められねばならぬ。文明は術なり、國の獨立は目的なりとして、上野の砲煙の中にあつても、學問を一日として、忽がせにしなかつた福澤先生の態度は、連綿として慶應に流れてゐる。「慶應義塾は單に一所の學塾として自ら甘んずるを得ず、その目的は我日本國中に於ける氣品の

源泉、知徳の模範たらんことを期し、之を實際にしては居家處世立國の本旨を明らかにして、之を口にいふのみにあらず、躬行實踐、以て全社會の先導者たらんことを欲するものなり」との精神は、生きてゐる。これが、慶應義塾の傳統であり、校風である。

凡そ國民をして、自治獨立の精神を、持せしめんと欲するならば、先づ學の獨立を圖るにある。而して、學の獨立を完うする道は、權勢情實の羈絆を脱したる一大私立學校を起さねばならぬとの意圖のもとに、早稻田大學は創立された。然し、明治大正の政界に、多くの足跡をのこした大隈侯の政治家としての性格は、移りて以て學校に反映せずには居らぬ。かくして、早稻田の學風は生れたのである。

帝國大學には、帝大としての雰圍氣がある。その好むところに従つて、入學した學生は、いつとはなしに、獨自の空氣を呼吸して、夫々の學の性格に、同化さ

れてゆく。かやうにして、帝大型、慶應型、早稲田型、或はまた専門學校型などと稱せらるゝ、學生や社會人が生れるのである。

居は氣を移すといふことがある。學校の具體的な設備は、學生に側面的な刺戟を與へて、教育訓練の効果を、助長するものである。校風と具體的設備は、教育の場にあつては、輕視することの出來ぬ因子である。特に、理科系統に屬するもので、設備の伴はぬ指導は、疊の上の水練にも等しいものといへよう。

然し、學校の最大要素は、教師にある。そして、その眞摯な態度と力強い人格とにある。學生を意識的に指導し、直接的な接合に於て、感化を與へるものは、教師だからである。生命のあるものを、眞底から動かすものは、つよい生命あるもののみだからである。

こゝで、教師について若干考へてみたい。ひろく云へば、人は誰でも、教師となる立場にあるものである。自己の見聞したことを傳へるのは、人の本性であり、

模倣は人の自然である。傳へるものは、模倣者に對しては、等しく師の立場に立つてゐる。

師はまた、時と處とを同じくする人々の間にのみに限らぬ。先生は、單に吾々のみの先生ではない。日本中の人の先生だとは、水上瀧太郎が、その先生について語つてゐるところである。また大島正健氏が述懐してゐるやうに、札幌農學校のクラークが、驛頭熱誠をこめて、教化した愛弟子達のためにのこした「青年よ大志を抱け」の一句は、我國青年子弟に深い印象を残した。その弟子達を通じて我國文化の進運に貢献した先生の偉業を、知るも知らざるも、この一語によつて、師としての景仰をよせたのである。かやうに、時と處とを超越して、師と仰がれる人もある。私共は、洋の東西に、はたまた百千年の昔に、師を求めることがある。古の英雄哲人の修練した人格と蘊蓄した學識と、成功した事業のあとをたづねて、感銘發憤し、之に師事することが多いのである。

然し、私共が語らうとする師弟の關係とは、主として學校に於て、意識的に教育指導に従事してゐる教師と、學生との問題である。

學校の教師は、教育を職業として、日々學生に接してゐる。學生（學校で學ぶ者を總稱する）は、先生等から學びとるの地位にある。教師の一言一句、一舉一動は案外な方面で、案外な影響を及ぼすものである。學生の成人の世界への力づよい、そして時には無邪氣な模倣的景仰は、學生を啓發する契機となると共に、弛緩せしめる起因をなすことも、往々にしてあると思はれる。大學高專の學生の場合、多少その趣を異にしてゐる。然し、その自覺の上に立つた、旺盛な研究意欲は、教師に對しても、眞摯なる態度を求めらる。然らざる場合は、教師に慊らぬ感情を懷くことがある。

指導者たる成人の不用意な面は、青年の眞實に求めてゐるものを與へないで、よしあしの批判を下す餘裕の備はる前に、彼等の心の中に、入り込むことがある。

自制が、教師に要請せらるゝ所以である。

教育の本義は、自然人を歴史人たらしめるにあると、解されてゐる。自然抽象人から、歴史を擔當する健民的人材を作るにある。

青年の特質が、前述のやうであり、教育の本義がこゝにあるならば、教師は、ただ戯れに、ただ輕卒に、學生と接觸することは許されぬ。集注的な思慮のもとに、つねに學生の放心を求めねばならぬ。知性の探求につとめるかたはら、確乎とした意志の鍛鍊と、道義的修養とに學生を向けるやうに、心掛けねばならぬ。

學校教育の趨勢は、主知的傾向にあつたやうである。殊に、大學高專の教師は、學者たらねばならぬ立場にあるので、餘念なく眞理を探求するの結果、理論を生命として、精神教育は、輕視する傾向にあつた。然し、最早、理論のための理論に終始する時代はすぎたのである。生命精神を根據としなければならぬのである。

私は、師弟關係を考へるに當つて、いままでの教育界に、最も缺如してゐたと思はれる、精神教育を中心としたのである。教師の感化は偉大である。一人の自覺した教育者の至誠は、青年の魂を開眼せずにはおかない。これがまた、教育が聖業であるとせらるゝ所以であり、教育者が、國家に對する第一の貢獻である。青年學徒の一生は、一に教師の指導精神にかゝつてゐるといへる。かやうな重大な關係にある師弟の縁は、如何にして結ばれるものであらうか。

二、師弟の縁とその交流

科學の進歩によつて、偶然の領域はせばめられてきた。然し、猶ほ人間の生活分野に於て、偶然のつき伴はぬところはないと云ひ得るであらう。

未開人は、自然と闘ひ、その交替作用によつて生活して來た。このやうな自然人は、わが大東亞共榮圏にも、若干ある筈であるが、自然人にとつては、自然環境は、全く偶然である。そしてまた絶對的であつた。人間は、その狀況のもとに生棲しなければならなかつた。然し、自發的な創意によつて、自己の運命を開拓し行動する能力を、固有してゐた。人類は、かやうにして、進歩の經路をたどつたのである。

文明の利器の存しなかつた原始自然の時代に於ては、人類は、全く自然現象の運轉に翻弄されてゐた。そして、その場その日の生活が、彼等の中心課題であつた。瞬間的な生命保持への意欲が、唯一の活動であつて、次の瞬間等を考へる餘裕をもたなかつた。況んや將來に對する預慮などは、更になく、動物的生活をつゞけて、ただ自己と現在のみの生活を、永い間求めてゐたのである。彼等は、全く自然の恩恵によつて生活したが、絶えず障礙と脅威をうけてゐた。ある時は、

多少の餘裕をもち、他の時は、窮乏のどん底に追いつめられることもあつた。

人類は、學びて採るの天性をもつてゐる。自然は、この人類の天性を發動せしめるの場として登場した。人類は、動植物の移動蕃殖の理法を新しい事實として發見した。そして、植物の栽培や、動物の飼育に、注意を向けるやうになつた。自然に服従することによつて、これを征服するの端緒を得たのである。かやうにして、自然の絶對的制約下にあつた人類は、狭少ながら、自由の天地を見出して活動するの素地を得たのである。

こゝに於て、窮乏と餘裕は、人類の本能的生活を進展せしめて、目的と意志の生活に、入らしめるの契機となつた。道具の發明と使用とは、自然との交渉を密接多彩的なものとした。文明の到來は、人間が自然の障礙物に對する鬭争の結果であるとは、經濟史家の説くところである。私共の一生は、この縮圖であつて、この發展段階は、初步の教育に多くの示唆を與へるものである。

自然と人間との鬭争、交替作用は、洵に興味が深いのである。自然は、人間を自然に適用せしめようとする力をもつてゐる。人間は、自然を攝取利用し征服しようとする力をもつてゐる。こゝに交替の作用が起るのである。

自然とはいふまでもなく、原始空間のことである。山河の形態、土壤、氣候、動植物の被覆の状態である。この自然の環境は、人間にとつては、所與のものであり、その交合の場は、偶然であるといつてよい。而も、環境は、人間の肉體と精神、進んでは、民族性や歴史の創造形成に、深刻なる影響を及ぼしてゐることは、否定出來ない事實である。

人類の進展に従つて、その行動は場限りの瞬時的なものから、判断と未來への預慮を前提とするやうになる。價值や目的の實現に向つて、行動するやうになる。その結果は、また一つの力となつて表はれる。文化力といふものである。

單純であつた自然と人間との交替作用は、複雑高度となる。現段階に於ける交

替作用は、原始景觀の總和に對する、現經濟人と文化水準と時の三要素の集積の形式に於て、行はれてゐるのである。

自然は、勞働過程によつて、人間の社會生活に作用するものである。人間も自然界の一部であるが、人間は動物と異つた意味で、血と肉と、更に頭腦をもつてゐる、自覺した存在である。人間は、精神的肉體的努力によつて、自然の形をかへ、生活に有利な態にした。そして、集團生活を始めた。集團の維持發展には、時を無視することは出来ない。時とは歴史的現實のことであるといへよう。

自然と人間との交替作用を、師弟の交流に對比しようとすることは、常規を逸するかも知れぬ。然し教育の任務が、自然人を歴史人にするにあるし、自然人は、自然との交替の結果、文化人になつたことからすれば、無理な對照ではないと思はれる。初期の教育に於ては、教師としての存在よりも、環境が絶對的なものであることは、既に述べた。従つて、この時代の學生の教師に對する關係は、

垂下受動的である。學年の進むに従つて、環境としてではなく、教師としての意義は重大な役目を持つものであり、その關係も牽引自律的なものとなつてくる。かやうにみるときは、大いに研究の餘地があるのではないかと考へるのである。ただ、師弟の交流は、あくまで人格と人格との協合であることは忘れてはならぬ。

原始景觀と一定の文化景觀が、私共にとつて、所與であり、偶然であるやうに、教育の場も、學生にとつては、所與偶然のものといひ得る。教育の場として、完成せる學校に於てもまた同様である。學生は、かゝる條件のもとに學ばなければならぬのである。このことは、看過することの出来ない大きな事實であると思はれる。

教育の場が、偶然所與であるとすれば、師弟關係の成立も、偶然と機縁によらざるを得ないこととなる。これは如何なる理由によるのであらうか。

日本の國民學校への入學は、原則として自由は許されてゐない。夫々定められた學區の學校に、入學しなければならぬ。そして、入學してからも、教師の選擇は、これをなすことができない。かくて、師弟の縁は、全く偶然によつて、結ばれるのである。

稍々入學の自由の許されてゐる、中等學校に於ても、入學後は、所定の學科を擔任の教師から學ぶことになつてゐる。而も十五歳前後は、志學で目的の立てられる時期である。この時代に、教師がまづかつたならば、その人の一生は駄目になるとまで、極論する教育者もあるやうに、この時代を導く教師は、人の生涯を劃すべき轉機の鍵を、握つてゐる大切な役目を有してゐる。こゝに至ると、學生には、師弟の縁は、全く運命的であるといへるであらう。

大學高專の場合は、入學に關する限り自由である。その好むところに従ひ入學し得る制度になつてゐる。また入學に際しては、豫め校風更に進んで學校の教師

のことどもについて、研究する丈の餘裕を、持つてゐるものもある。そして、大學高專の學問生活の特徴である研究会や演習には、自己の選擇希望によつて、崇敬する教師の薫陶にあづかることもできる。修得すべき講座にも、若干の選擇の自由は許されてゐて、師弟の縁は、學生側に、決定権があるやうに思はれる。然し實狀は必ずしも、さうなつてはゐない。それは、入學制度によることもあり、學生及び父兄の側に於て、教育の本義に徹せず、學問に對して必ずしも正當な考へを持つてゐないことにもよる。更にまた、現下の教育制度にもよる。このことからすれば、師弟の縁は、眞の意味に於て目的的に結ばれることは、極めて稀である。幸ひにして、求むるところの師弟關係が、結ばれることもあるが、これは、機縁たるの性質を多分に持つてゐる。

こゝに、師を得た場合の歡喜と感謝とを味ひ、その幸運をよろこぶこともあるが、求めて得られない不運と哀愁とに、閉されるものもある。

師弟の交流は、師弟の縁の成立の時に始まるものである。そして、學校の師弟の縁は、偶然性に基くものである。偶然的環境に生活した人類は、眞摯敢闘の交替を挑んで、今日の文明文化を創つてきた。それは、一面に於ては、人類固有の精神作用によるが、他面には、追ひつめられたる生活の窮乏といふ、具體的物質的な面から、驅り立てられたことにもよる。

學生は、一般的に云つて、實生活から遊離してゐる。學生の特權はこゝにあるし、かくてこそ、教育の本領も發揮し得らるゝのであるが、このことから、何か不足なものを感じしめる。學校に於ける教育は、精神教育を基根としなければならぬが、學校外の教育の場は、必ずしも、かゝる雰圍氣にない。このやうな空氣に育つた學生が、いまのやうな教育制度の學校に入學して、偶然機縁によつて、師につくのであるからして、師弟交流の現状は、自ら想像することが出来る。眞劍味の缺如といふ一語に、つきると思はれる。

然し、このことは、徒らに社會や制度の罪に歸すべきではない。教育は、人と人との生命あるものの交流である。學ぶ者の志學への眞劍なる心構へと、これを導く教師の態度の如何によつて、容易に解決することのできる問題である。

吉田松陰の門下からは、幾多の人材が傑出した。その門下生等は、どんな條件によつて、入門を許可されたのであらうか。松陰の課した試問は、いつも、「お前死ねるか」の一語にすぎなかつた。生死の問題は深刻である。松陰は、この一語によつて、人物を觀破し、入門の許否を決定するのであつた。

明治の元勳山縣狂介(有朋)は、松下塾の一人であるが、入門に際して、師の「狂介、お前死ねるか」の一語にあつて、即答することが出来なかつた。一日の猶餘を願ひ、熟慮の後、解答すべき旨の返事をした。

翌日、待ち構へた師の「どうだ、決心ついたか」の問に對して、容儀を正して「私は死ねます」と契つたので、入門は許された。松陰は、狂介の大成すべき人

物たるを、同僚に告げたとのことである。

すでに、生命を捧げ、生命をあづかつた師弟の交流は、鍊々相摩する。一人の偉大なる教師の至誠は、氣魄ある青年に、直ちに感應するものである。こゝに、魂と魂の交流がはじまるのである。

かやうにして、學ぶものは、命令的力の發動を待つことなく、自ら決意せるところに従ふのである。教師はまた、決意せざるを得ないやうに、内面的教育をほどこしてゆく。この場合に於てはじめて、青年の特質は生き、教育の使命を果すことができるものといへよう。

自己の決心したことを、何時にても貫徹すべき精神力と體力とを、備へた人が出来れば——その場合には、吾人が最も大膽なる願ひを以て渴望したすべてのものは——これらの人々の存在の中から自然に生じ、これらの人々の存在の中から自然に發達して行くであらう。斯くの如き時代は、吾人の指導を要せず、否じ

しろ吾人こそ、學ばなければならぬ程のものであらうとは、フイヒテの所懐である。

松陰、佐久間象山に敬事した。松陰がはじめて、象山を訪れたのは、彼の二十二歳の時であつた。その當時、松陰は象山を以て、尋常の洋學の徒と思つたので、ただ新しい知識を學ぶ位の考へからして、平服のまゝ、訪問したのであつた。すると、象山は儼然として、「君は學問をする積りか、それとも、言語の末を學ばんとする積りか。若し、自分と學問を共にする積りならば、弟子の禮を正しうしてこい」との一喝にあつた。

松陰は、象山の非凡の人物たるを覺つて、更めて禮服を着用して、入門の禮を執つた。爾來、師を尊重する念が深かつたのである。「余、象山に師事し、悉くその持論に服す。毎事、決を象山に取る」やうな、深切な師弟の關係を結んだのである。

毎事、決を師にとつた松陰は、ヘルリについて渡行のことについても、師に相談した。象山は、一詩を送つて、これを激勵した。またこの一詩のために、象山も罪の身となる。「之の子靈骨あり、久しく厭ふ壁壁（志のなくグヅ／＼してゐるもの）の群。衣を奮ふ萬里の道。心事未だ人に語らず。即ち人に語らず雖も、付度す或は因あり。行を送りて郭門を出づ。孤鶴秋旻に横はる。環海なんぞ茫茫たる。五州自ら隣を爲す。周流して形勢を究めば、一見百聞に超えん。智者は機に投ずるを貴ぶ。歸來須らく辰に及ぶべし。非常の功を立てずんば、身後誰か能く寶せん。」と、意氣投合の交りを結んだのである。

ギリシヤに、ダイオゼニスといふ哲學者のゐたことは、私共のよく知つてゐるところである。彼は、アンチセニースの弟子たらんとして、その入門を願つたが、師は彼を見るや否や、大喝叱咤した。「この豚兒め、汝の如きものは、我が弟子たるを得ず」と、持つてゐた杖を振り上げて、ダイオゼニスを撃たうとした。

然し、彼は更に動かないで、泰然として答へた。自分の志は、既に決つてゐる。弟子たることが出来なければ、自分は決して、こゝを去らない。うつなら、撃つて下さい。しかし、自分の精神を打ち碎くところの堅杖は、ありますまいと、決意の程を示したのであつた。師は、大いに喜び迎へて、入門を許したのである。かやうに、師の儼然たる態度と、子弟の眞摯なる決意のもとに、師弟關係が結ばれなければ、爾後の交流に期待し得るところは少いであらう。

師弟の交流は、眞に六尺の孤を托せられたる責任と、托し得た師への信頼のもとに、はじめられねばならぬ。そして、青年の特質が、模倣にあるとすれば、教師の一言一動、或は包容の愛は、學生に重大な感化と影響とを、與へるものである。ある教育學者も「自然の教育の根本形式が、模倣であることを語つた。「若し教育の文化形式が、自然の教育に結合しつゝ、之を文化化するにありとせば、學校教育に於ても、模倣は極めて重要な位地を保有しなければならぬ」と、

設いてゐる。

教育は、火 點するに、火を以てする真剣さを必要とする。師弟間には、血みどろな奮闘と犠牲とがなければならぬ。熱のない鐵に、軽い鎚では、人物の養成は期待出来ない。教育の改革は、偶然の運命を、意志的にきり開く心構への問題である。

三、師 に 望 む

教師に望み、學生に求めるところは、述べきつた主旨によつて、自ら明かである。論じきつたつて、私の學生生活を、振りかへつてみると、教へをうけた多くの先生の姿が、眼に浮んでくるのである。報恩と感謝の念に、せきたてられる。そして、私の小さな身を省みると、教育といふものは、何時になつても、

何か残すものであるといふことを、痛感するのである。

鍛へられた先生ほど懐しく思はれる。中には、忘れないまでも、顔と名とが、却々思ひ出せない先生もある。印象に強く残つてゐる先生は、學問知識のことは暫く措いて、眞愛に終始して、寛嚴よろしきを得た先生である。特異の強い人格と熱烈な教育精神とをもつた先生である。威嚴を持して、われ／＼の眼に、その心の奥底が、容易に見ることの出来ぬ先生と、何の蟠りもなく、心の深奥にとび込むことのできた先生である。即ち、仰ぐ偉大さと、親しむ偉大さを、保持した先生である。また、ユーモアに溢れた先生にも、魅力を感じた。

求めるところ強く深く、與へるところの懇切なる先生の感化は大きい。教師とともに大學高専の教師は、學者であつて欲しいのは、勿論のことであるが、教師の意義と價値は、學問知識の傳授の外に、人格的交合の點にある。教育者の態度の伴はぬものには、求めて何か憐れぬ淋しさを、感ずることがある。

獨逸への回想の著者スウェン・ヘデインは、彼の師事した有名な地理學者リヒトホーフエンに對する、崇拜と讚歎と感謝の念を次のやうに表はしてゐる。

「フエルヂナンド・フォン・リヒトホーフエン以外に自分の發展と生命線とに力強い影響を與へるものはなかつた。自分が一身を捧げた科學——地理學に於て彼はその當時の第一人者であつた。だが、彼は科學者として最高の存在であり、稀に恵まれた人間のみが達しうる高い所まで昇り得た人であるとは云ひながら、みじんも名譽慾や權勢慾にとらはれることがなかつた。いつも謙虛であり、物靜かであり、控へ目勝ちであつた。かういふ特質をもつもののみ、眞に偉大の名に値するであらう。自分は生涯のうち随分と立派な大人物に出會つたが、かういふ點でリヒトホーフエン以上の人に接したことがない」と。

ヘデインは、教師にかゝる態度を求めたのであつた。

學校は、たゞ現在の世界に對して、鋭敏なる人間の訓練場として終つてはなら

ぬ。それ以上に、將來の豫備的な行動の源泉とならねばならぬのである。現在にのみにかゝる形式を、經々として株守する態度は、排撃さるべきであると思ふ。教師はこの意圖のもとに、生きた教育に従事して頂きたい。生きた教育とは、云ふべくして、却々むつかしい問題である。理論を以て解決できないものがある。教育上の感のよさが要請される。このことを念ふにつけて、故き恩師から聞いたある實際談を披露したいと思ふ。

いま敵性國となつてゐる英國の話である。十九世紀のグラットストン時代に、スボルジョンといふ、宗教家の教育者があつた。彼は彼の建設した會館で、數十年間青少年を説いて倦まなかつた。少年等は、彼を慈父の如く慕ひ、その感化は偉大であつたのみならず、彼は、當時の批評家をして、英國の總理大臣はスボルジョンなりといはしめた程、時の宰相グラットストンの尊崇師事をうけたのである。

彼はまた、神學校を設立して、學生を訓育してゐた。この學生とスボルジョンの間に一事件が発生したのである。その事件といふのは、學生の喫煙問題である。

スボルジョンは、當時の或る宗派のやうに、喫煙するものは、罪を犯すものである。罪を犯すものは、クリストの弟子となる能はずなどといふ所謂確々たる形式的教育によつて、青年の魂を固結せしめるやうな人ではなかつた。併し、校則として、學生には禁煙を命じてゐた。

スボルジョン自身は、疲勞感を覺えた時など喫煙してゐた。然し彼は、學生に隠して、偽善を極め込むやうな人物ではなかつたので、何時とはなしに學生の知るところとなつてゐた。

ある時、ズボラグループの一人が、「時に一服やらうではないか。校長もやつてゐるではないか」などといふところから、衆議一決して喫煙を企てた。彼方此

方と適當な場所を探し求めて、漸く學校の裏手にあたる石炭庫を選定した。校規違反であるので、公然と吸ふわけには行かぬので、グループはこゝに這入り込み、内鍵をかけて用意の煙草を吸つてゐた。

折柄、校長は校内を巡視して、裏手にやつてきた。鋭敏なる彼の嗅覺は、煙草の香に感づいた。十五六人の仲間が吸つてゐたので、隠す術もなく、その巢窟は直ちに發見された。

喫煙は校規違反であり、またこんな場所で喫煙するのは危険至極であるので、捨ておくわけにはゆかぬ。如何に處置しようかと考へたスボルジョンは、取敢へず戸を靜かに叩いた。

中の連中は、仲間がやつてきたものと錯覺して、「誰だ、誰だ」名乗るならば入れてやらうと、外の返事を求めた。待つた返事は以外にも、「スボルジョンである」の一語であつた。學生は校長がこんな場所に來るとは思はず、他の仲間が

嚇してゐるものと思つたので、「おどかすな、煙草が欲しければ、正直に名をいへ」と應酬して、一向に戸を開けさうにもなかつたので、校長は聲をはり上げて「われは眞にスボルジョンである」といつた。

かやうに正面を切られては、最早疑ふ餘地はない。グループは周章蒼愕して、一時は茫然とした。校規違反の結果は自ら明かである。學校から退くことは、牧師としての地位が得られぬことになるなどと、後悔と悲觀の想像にからまれて誰一人として、戸を開けようとするものがなかつた。

ところが、こゝに度胸の据つた頓才の利く一學生があらはれた。彼は戸口に進み出で、今しも戸を叩く校長に向つて、とぼけた音響を放つたのである。「おいおい嚇かしてはいけないよ。お前の假聲が餘りに校長に似てゐるから、連中が間違へてゐるぞ。いたづらをするを容赦せぬぞ」と。

この時、スボルジョンが黙視したならば、何の問題も起らなかつたのであらう

が、校長として學生にやり込められて退くわけにも行かず、また、お前は校長でないなどと、餘りにも平氣に云ふ學生の態度が、癪にさはつたので、多少怒氣を含めて、一層聲をはり上げて、「吾はスボルジョン、この學校の校長である。他人の眞似などするものではない」と戸の開放を求めたが、これに答へて、前の一學生はカラ／＼と打笑つて、「お前は、スボルジョンの聲を眞似る事は上手だが校長の腹を眞似る事は出来ない」とみえる。一體わが尊師は、こんな處を嗅ぎ歩くやうな人ではない。度量は海の如く、識見は天の如き人だ。寛嚴よろしに従ふ、時と處とを辨へてゐる人である」と、殆ど一喝的な應酬であつた。

應對即妙、喜怒哀樂の發して節にあたる事が、教育者の本領である。そこに人間味のひらめきも感ぜられる。單にロヂックと威信のみによる人間教育は、學生を畸形的なものに追ひ込む恐れが往々ある。

スボルジョンもこゝに至つて、最初の怒氣も和らぎ、この學生の意氣は認める

べきであると考え直した。傍ら、はりあひの中にも、實は縮み込んでゐる學生の心理を感得したので、こゝは大目に見るがよいと決めて、そのまゝ歸つて行つた。果して、學生はその徳に感じて、校風は一新されたといふことである。

戸は叩くべしである。何者、そのことによつて、喫煙に皆無になつたからである。然しまた、黙つて引込んで、その事を忘れたやうに、再びその問題に觸れなかつた。ボルジョンの教育者としての徳をたゞへたい。師弟の間柄はかくもありたいと思ふ。

その後數年を経て、そのグループの一員であつたと思はれる愛弟子に向つて、お前もあの時居たらう。其の時俺をやり込めた學生は何某といふだらう。傳道者には、その智とその膽が必要である。あれは必ず群を抜くに相違なしと、却つて稱揚したのであつた。

この愛弟子といふのは、ホワイトのことである。明治年間、日本に來朝して活

躍した有名な宣教師であつた。この話もホワイトのもたらした實歴談であるが、私はこの話によつて、學生の稚氣に過ぎた校規違反を懲通するものではない。校規は、學生生活の基準であるから、嚴に取締る要のあることは論を待たぬ。然し常に考へなければならぬのは、學校は將來への人物を養成する使命を有することである。この判定は、教育者自らの責任であると思ふ。

教師が媚態的態度で、學生の歡心を求めるかのやうに言行することは、指導上甚だ面白くない。學校に於ては、父兄の門地地位等を顧慮して、學生の教育を左右されることがあつてはならぬ。郷原は徳の賊なりといはれてゐるやうに、好々爺的態度は、學生をして、有爲の材たらしめるものではない。學校には、社會的な意味での階級的支配關係等はない筈である。そこには、教師の人格識見に對する尊敬親愛があるのみである。先輩と後輩、學徳の高いものと、未熟のものとの間に、道を求める交流關係に於てのみ、上下關係が存するのである。そして、こ

べきであると考へ直した。傍ら、はりあひの中にも、實は縮み込んでゐる學生の心理を感得したので、こゝは大目に見るがよいと決めて、そのまゝ歸つて行つた。果して、學生はその徳に感じて、校風は一新されたといふことである。

戸は叩くべしである。何者、そのことによつて、喫煙は皆無になつたからである。然しまた、黙つて引込んで、その事を忘れたやうに、再びその問題に觸れなかつたスボルジョンの教育者としての徳をたゞへたい。師弟の間柄はかくもありたいと思ふ。

その後數年を経て、そのグループの一員であつたと思はれる愛弟子に向つて、お前もあの時居たらう。其の時俺をやり込めた學生は何某といふだらう。傳道者には、その智とその膽が必要である。あれは必ず群を抜くに相違なしと、却つて稱揚したのであつた。

この愛弟子といふのは、ホワイトのことである。明治年間、日本に來朝して活

躍した有名な宣教師であつた。この話もホワイトのもたらした實歴談であるが、私はこの話によつて、學生の稚氣に過ぎた校規違反を懲適するものではない。校規は、學生生活の基準であるから、嚴に取締る要のあることは論を待たぬ。然し常に考へなければならぬのは、學校は將來への人物を養成する使命を有することである。この判定は、教育者自らの責任であると思ふ。

教師が媚態的態度で、學生の歡心を求めるかのやうに言行することは、指導上甚だ面白くない。學校に於ては、父兄の門地地位等を顧慮して、學生の教育を左右されることがあつてはならぬ。郷原は徳の賊なりといはれてゐるやうに、好々爺的態度は、學生をして、有爲の材たらしめるものではない。學校には、社會的な意味での階級的支配關係等はない筈である。そこには、教師の人格識見に對する尊敬親愛があるのみである。先輩と後輩、學徳の高いものと、未熟のものとの間に、道を求める交流關係に於てのみ、上下關係が存するのである。そして、こ

の關係は、私的條件の挿入を許されぬ純粹無垢のものたるべきである。この信念に基いた熱情こそ、學生の血脈を振盪することができるのである。

この故に、師弟の上下關係は、高壓的手段に陥ることを理想としない。このためには、教師は時々、學生の基列に於てものを考へる必要がある。學生には、學生としての慾求と不満もある。學生をして胸襟を開いて語らしめることは、學生を理解するの道である。學生を理解することは、指導上の根基である。そしてこのことは、教師の學生に對する愛の一事によつて、解決せらるゝものと思ふ。

私は、今迄、青年の自覺を促し、これを中心論を進めて來た。然し青年は、唯だ一身の自覺を以て満足すべき時ではない。教師は、青年の一身の自覺から、志趣の遼大な、覺他の志を起さす責務があると思ふ。歴史化の意義は、こゝにも認められるのである。

四、學生に求む

從來の學校教育は知識偏重の傾きがあつた。殊に大學高專に於ては、知性の探求が最大のそして唯一のものゝやうな感があつた。學生が師に求めるところは、知識の開拓をうくるにあつて、それ以外は關知しなかつた。従つて、豊かな知識體系の所有者のみを迎へて、精神鍛鍊を唱へ人間的陶冶を要求する教師は、むしろ輕視する傾きがあつた。

私が思ふのに、學生生活の有難味は、総合的な指導訓練に預り得るところにある。學生の心掛け次第では、透徹した學理の指導と、立派な人格的感化と、血のにじむやうな人間的陶冶とに、餘念なくあづかり得るにある。

眞理の探求と生活理念の検討は、大いに勵むべきであるが、據つて立つところ

の精神の修練を忽がせにすべきでない。將來の指導者として求めらるゝ學生は、折角の學生生活の特權をすてた師に對する淺薄な觀察は、改訂しなければならぬ。この故に、學生の精神的覺醒を第一に求めるのである。

幕末の偉人の一人に、横井小楠がゐた。彼は、熊本に私塾を開いて、子弟を訓育してゐたことがある。その當時は、勤皇佐幕、攘夷開國の論が八かましく、人心は恟々としてゐた。この渦中にとび込んで、自ら改造運動に奔走しようとする鮫島某といふ門下生がゐた。鮫島は決意を固めて、小楠に暇乞ひに來た。小楠は筆をとり、平生の所懐を認めて、餞別とした。即ち

「五尺の短身一竹の筈。千山萬水去つて蹤なし。平生の心事知る何れの處ぞ。寄せてあり芙蓉第一の峯」

短軀の彼小楠は、三十一歳の時、藩命を帯びて江戸に遊學した。彼はこれを機會に、諸國の山河を踏破して、民情の視察を行つた。傍ら彼は、天下に師たるの

士人を求めて歩いたのである。而も、富士の絶嶺に比すべき士は、容易に求められず、天下に人なしと豪語した。爾來彼は、私かに身を富士の俊容に寄せて、子弟を指導してゐたのである。

國事の改革奔走には、崇高にして偉大な先達の師を訪ね、同志を求めなければならぬ。

小楠は、鮫島を送るに際しても、成功を祈り、高名を果せとは云はなかつた。芙蓉のやうな天下一等の師につき、同志と結合するの心構へを喚起要請したのである。

學生は眞劍さを以て、師を求めなければならぬ。自己の輕薄な趣味的な感情から、眞の師を見失つてはならぬ。現下の教育制度のもとにあつては、師弟の縁は、偶然であり機縁であるとなした。それだけに、學生の眞劍さを要請するのである。自ら求めるところが深刻であれば、その師は得らるゝものである。學内に於て、

めぐり合ふことが出来ない場合には外に求める道も、學生には残されてゐる筈である。杉浦重剛が、精神は坦堂先生により、學問は麴廬先生により、識見は月洲先生によりて、指導をうけたと述懐してゐるやうに、夫々の立場に於て、師事する方法もある。何れにせよ、學生は師を求めねばならぬ。師のない人生は、暗黒であり、寂漠である。

支那の春秋戰國の頃のことである。黄河の北に燕といふ國があつた。その國に不老不死の術をわきまへてゐるといふ師があつた。

老と死とは、人の厭ふところであるから、遠近よりその教へを乞ふものが殺到した。その名聲は、燕君の知るところとなつた。長生を欲する君は、使者を派してその術の傳授にあたらしめた。使者は急行したが、着くこと既に遅く到着の前夜その不老不死先生は死んでゐた。

命を果し得なかつた使者は、遲行の故を以て、誅罰されんとした。然し、幸臣

がゐて、自分の生を惜しむところから、不老術を研究したのであらう。然るに、研究家自ら死んで仕舞つたのであるから、その術を傳授されても、何の役にも立たぬであらう。彼は山師である。こんなことで誅するのは、君徳に關すると諫めたので、君主は處罰を思ひ止まつた。

たまく／＼學ぼうとして尋ねた人に、齊子といふものがあつた。彼は不老不死先生の死に接して、大失望をした。「ア、惜しいことをした。モ―一日早かつたなら、傳授にあづかり得たのに」と、嘆息すること久しかつた。其處に居合はせた富子といふ人は、齊子を間拔野郎と哄笑した。

二人の論争を聞いてゐた胡子が、口を開いた。人といふものは、學理は充分知悉してゐても、これを應用實行する才のないものがある。私の友人に算數の堪能家がゐた。その死にのぞんで、子供に秘訣を傳授した。子は、父の云ふところを一語もろさず記して、反復熟讀して一切を暗記してゐた。然し、一向に應用する

ことが出来なかつたので、子は諦めて、父の秘訣を友人に傳へた。友人は數日にして、算數の大家となつたのである。齊子の嘆息は笑ふべきでない。

これは列子にある話である。寓話であると思はれるが、この物語の中に學ぶ者の態度として、多く教はるところがあると思ふ。

教師は傳達し、學生はこれを學ぶのである。學生は、師を踏み臺として、竿頭一步を進めるだけの熱意を持たねばならぬ。師は、よろこんで之を許す包容力と犠牲の精神があつて欲しいのである。學生は自ら師の胸底を叩かないで、不平懣焉の情など起してはならぬ筈である。

學校を以て、保守形式の殿堂であると啣ち、講義は千篇一律であるとの不満學生の聲を聞くことがある。學生の一部には、人を批評し言動を誹毀することに妙を得てゐるものもある。然し、この不満學生が、眞に尊師に求めて、内なるものの修養につとめてゐるかどうか疑問である。

學校をして深新なものとするのも、講義をして熱あらしめその深奥に觸れざるを得ないやうにするのも、一に學生の態度にかゝつてゐるのである。學生に愛校の精神と、究めて止まない熱情とが充滿してゐれば、その盛り上げる力は、學校に教師に、必ず反映するものである。

私共學徒は、燕君のやうに自ら叩くことを忘れてはならぬ。幸臣のやうに、安價な諦命の徒となるべきでない。富子のやうに笑つてさるべきでもない。齊子のやうに、師を求め、師に求める熱意が必要である。不老不死先生が自ら駄目であつても、若し自分が、その原理を學び得たならば、必ずや、蘊奥を極め精髓にふて、これを物にして見せると、力む氣魄と熱意とを持たなければならぬ。

然しながら、學生は尊大になつてはならぬ。苟も教師たる人は、學校を代表してゐるものである。學生に先んじて學を究め、人生の理趣を探求して、學生の向上を念願してゐるものである。學生が、生半可な自我的觀察を以て、學校を非議

したり、師を敬ふの心を忘却し終ることは、日に背くと同様、永久に暗きに向ふものといふべきである。

天地萬物が、謙虚に、日光をうけ、雨露を帯び、風に吹かれ、段々に伸びてゆくやうに、學生は、謙虚な心を以て、師に接すべきである。求め得た師に對しては、凡てを傾けて没入すべきである。自我を捨て、こそ、個性の培養せられる道も開かれるのである。

學生の心構へがこゝにあれば、學生は常に主動的立場に立ち得るのである。齊子の意圖は、こゝにあつたのである。かくて、學生は主體者として、自律的な學生生活の快適を味得しうるのである。

私が學生に求むるところは、師に接する謙虚の心と、師を求め師に求める熱情とである。

五、結

び

副島種臣は、極めて人格の高い謹嚴な人であつた。代々、學者の家柄で、漢學の造詣にも深かつた。この故を以て、明治十一年の當時、侍講として、明治天皇の側近に奉仕してゐた。

然るに、謹直な彼は、堪え得ない事情のもとに、病氣を理由に、辭表を奉呈して、自邸に謹慎することになつた。陛下が、このことを知り給ふや、早速、其の次第を御下問になつた。侍従の者から其の次第を申上げた。

翌日、陛下は、侍補の職にあつた土方久元を御招きになつて、一通の御書面を副島種臣に御托しになつた。

種臣は、謹んで、勅書を拜受した。勅書を披いて、副島は感泣した。

卿ハ復古ノ功臣ナルヲ以テ朕今ニ至ツテ猶其功ヲ忘レス故ニ卿ヲ侍講ノ職ニ登庸シ以テ朕ノ徳義ヲ磨ク事アラントス然ルニ卿カ道ヲ講スル日猶淺クシテ朕未タ其教ヲ學フ事能ハス比日來卿病蓐ニ在テ久ク進講ヲ缺ク仄ニ聞ク卿侍輔ノ職ヲ辭シ去テ山林ニ入ラントス朕之ヲ聞テ愕然ニ堪ヘス卿何ヲ以テ此ニ至ルヤ朕道ヲ聞キ學ヲ勉ム豈一二年ニシテ止マランヤ將ニ畢生ノ力ヲ竭サントス卿亦宜ク朕ヲ誨ヘテ倦ム事勿ルヘシ職ヲ辭シ山ニ入ルカ如キハ朕肯テ許ササル所ナリ更ニ望ム時時講説朕ヲ贊ケテ晩成ヲ遂ケシメヨ

上、御一人の身を以て、尊師として遇せらるゝ、陛下の思召しは、私共學に従事するものゝ、心して拜讀銘記しなければならぬところである。師弟の關係はこの勅諭を鑑としなければならぬ。

明治天皇御製

分けのぼる道のしをりとなる松は

位なくともうやまはれけり

第二章 孔門師弟の道

一、儒教と日本の精神的準備

釋迦、孔子、ソクラテス、イエスは、世界の四聖として、崇められてゐる。その思想感化は、幾千年の後の今日まで、炳乎として存してゐる。四聖の足跡の偉大なる所以は、生命の崇高至大の具現者である人類を愛し、人類を研究して、人類の中に住み、人類を向上展開せしめるために、一生を捧げた點にある。

四聖の教誨は、人類の生命發展 中樞原理に論據して、抽象論を以て終始しなかつたところに、その特色がある。

人類の教師たるの條件には、多々あるであらう。假に要約してみると、愛情の豊かなること、人の性格動向を明察して、その人即應の教へをなすこと、道を學び人を教ふることを以て無上の楽しみとして、これを天命と自覺すること、及び

常に新たな學識の體得に心がけ、その根源を究め深めて、實力の養成に留意することにあるといへよう。

孔子が、如何にこれらの條件を具備してゐるか、以下數項に於て述べることとする。孔子は、いふまでもなく東洋の産である。今を去る約二千五百年の前の誕生である。彼の思想は儒教として、今日まで傳はつてゐる。この儒教思想は、支那は勿論のこと、日本にも重大不朽の影響を及ぼしてゐる。儒教の精神は、孔子のものした論語をはじめとして、幾多のものによつて知ることが出来る。これらの學問的考證は、私共の如き淺學者の企圖し得ざるところでもあり、かつまた、本稿の目的でもない。私は、ただ論語によつて、孔子の平生の起居動作を伺ひ、その間に於けるこまやかなる師弟の情を省察して、師道の荒廢の嘆かるゝとき、われわれ學徒の温故知新一資となしたいと思ふのである。

論語が、はじめに我國に傳へられたのは、應神天皇の御代とされてゐる。儒教

は、「古の明德を天下に明かにせんと欲する者は、先づ其の國を治む。其の國を治めんと欲する者は、先づ其の家を齊ふ。その家を齊へんと欲する者は、先づ其の身を修む。其の身を修めんと欲する者は、先づ其の心を正しうす。其の心を正しうせんと欲する者は、先づ其の意を誠にす。其の意を誠にせんと欲する者は、先づ其の知を致す。知を致すは物に格るに在り」と大學に認されてゐる如く、修身齊家平天下の思想である。明德と親民と至善に止まることは、大學にも三綱領として規定してゐるやうに、孔子の學問は、身を修め人を治めるといふ、道徳と政治とを兼ね教へることを主眼としたのである。一面に於て、道義的精神を闡明し、他面に於ては、この道念を基礎として、社會の組織や制度を不斷に改良して行かうとするにあつた。従つて、有徳の君子が國政にあづかることを理想としたのである。然し、この思想は展開して、支那では易姓革命となつた。禪讓放伐の實狀を呈した。これが禍して、不幸なる姿を繰返してゐるのが、今日までの支那

の歴史であつたといへよう。

わが國に、論語が移入されて以來、當時一日の長であつた支那の文物制度は、その思想と共に傳播した。易姓革命は、わが國にとつては、許すべからざる思想であるが、支那の動亂の亡命者等に乘ぜられる危険性もあつた。蘇我氏の如きは、その尤なるものであるといへよう。

しかし、大和民族の偉大なる精神的準備は、この至難なる試練に打ち勝つたのである。私共の祖先は、外來思想の精髓の攝取することに成功したのである。即ち神道を以て政治の根本とし、國民の道徳的生活の向上には、儒教を採用し、宗教生活の醇化を佛教によつて圖つたのである。この成果が、聖徳太子の憲法であり、天智天皇の大化の革新であると或る史家は解いてゐる。こゝに於て、わが國の方針は確立したのである。

然らばわが國の精神的準備は、何によつて涵養せられてゐたのであらうか。三

種の神器を措いて外にないと、私は思ふのである。

皇祖天照大神が、瓊々杵命を、わが大八洲に降し給はんとせられたるとき、三種の神器を授け給ひて「吾兒、視此寶鏡、當猶視吾、可與同牀、共殿、以爲齊鏡」と仰せられた。三種の神器とは、鏡、玉、劔であることは、私共のよく知つてゐるところである。天照大神は、神器を以て、唯皇位の御證とせよと仰せられたのみではなく、その御意圖は、實物を以て、無言至大の聖訓を垂れ給ふにあつたと、拜察する。このことは、日本國民として、歴史の第一頁に學ぶところである。このことによつて私共はまた、皇國に對する感激と誇りと責任とを自覺自認するものである。鏡は明かに萬物を照らして、その正邪曲直を判別反照するものである。無垢の心體である。眞知靈覺の具象である。玉は、方圓温潤なもの、人に施しては、仁愛の徳である。劔は、勇武決斷の象徴である。皇祖は、この三種の實物を以て知仁勇の三徳を垂致せられたものと拜察する。

儒教を學ぶにあつて、このことは前提として、銘記しなければならぬ。

論語に「知者は惑はず、仁者は憂へず、勇者は懼れず」とある。孔子はまた、自ら謙遜して、「君子の道なるもの三。我れ能くすることなし。仁者は憂へず、智者は惑はず、勇者は懼れず」と、その三徳の必要と修練とをといひてゐる。中庸にも、知仁勇は天下の達徳なりとして、研學の眼目としてゐる。

知仁勇のことを述べるにあつて、王陽明の有名な啾々吟を見逃すことは出来ない。王陽明は儒教に對して獨特の見解を開拓したものである。良知良能の學を解き、知行の合一を叫んだのである。日本の明治維新は、陽明の弟子によつてなされた。ウエルズをして驚嘆せしめたほど、維新功勞の士と關係のあつたのである。啾々吟は、人生處世の理趣を悟得する上に於て、指針たる價値を有するものであると思ふので、繁を厭はずこゝに傳へることとする。

「智者は惑はず。仁は憂へず。君胡んぞ戚々眉雙を愁ふ。歩に信せて行來せよ皆坦道。天に

懸つて判下す人謀に非ず。之を用ゆれば則ち行ひ、舍つれば則ち休む。此の身活蕩虚舟を浮ぶ。丈夫落々天地を愀かす。豈東縛を顧みて窮囚の如くならんや。千金の珠もて鳥雀を弾ぜんや。土を掘るに何ぞ煩はさん鑄鑊を用ゆることを。君見ずや東家の老翁、虎の患を防ぐ。虎夜室に入つて其の頭を銜む。西家の兒童、虎を知らず。竿を執つて虎を驅ること牛を驅るが如し。痴人は噎に懲りて遂に食を廢し、愚者は溺を畏れて先づ自ら投ず。人生達命自ら洒落、讒を憂へ毀を避けて徒らに嘖々たらんや」

此の詩は、陽明が殺害されんとしたとき、その逃避を勸奨した弟子等への心血の所懐である。この解釋と眞意義については、割愛する。

歴代天皇に於かれては、文字の傳來する以前すでに、知仁勇の三徳を實物によつて、反照され、御統治の龜鑑として、事毎に之によられたのである。従つて、大和民族の精神も、こゝに養はれた。その深奥にきざして、實踐生活の準繩となつたのである。然るに、文字によつて説かれたる國々に於ては、實際生活と遊離

する傾向をたどつた。私共の祖先は、文字を解し得なかつたときに、實物の垂訓を受けたのである。この時代の實物垂訓こそ魂に根基して、一生を貫くものである。この意味に於て、日本に文字の發達することの遅かつた事實は、むしろ幸福であつたと、私は思ふのである。

文明開化の世に於ては、學問は一日も忽がせにすることは許されない。廣く知識を世界に求めなければならぬが、學問は國家と生命を共にすべきものである。わが國が、このことに成功したことは、既にのべた。また、學問の道は、内なる人を高めることが、第一目的である。徒らに抽象的イズムを以て、外面的精彩の衆群を拔んずることを能事とするのは、學問の弊害といふべきである。文字と實生活との遊離はいつの世でも認められる。大東亞戦争遂行下にある日本は、奉公の一死を鏡として、それにうつる赤裸々なる姿を凝視しつゝ、總力を結集して、學問と實生活との一致をはからねばならぬ時にあると思はれる。

學者の弊害は、孔子の時代にも、既に觀取されてゐた。「古の學者は己れが爲めにし、今の學者は人の爲めにする」と、學問をもつばら世に誇り、人への聞え、または名の爲めになすものとして、今の學者は心得てゐるのではないかと、孔子は嘆息してゐる。昔から、文士に筆端あり、武士に鋒端あり、辯士に舌端ありといはれてゐる。この事實を、われ／＼は到る處で發見するのである。徒らに、内を捨て、形を求め、外面を貴ぶ結果である。

日本が、いま敵として戦ひつゝある米國をみると、彼はもつばら、表面外形の整備と發展と擴張とに多忙をきはめて、内面的省察をなす餘裕をもたなかつたといひ得る。現世的欲望の旺盛な追求にかられて、未來に關し、永遠に關して、人類の心理と理想とを缺いてゐた。宣傳と連衡と威嚇とをこれつとめた。その勢の赴くところは、即ち破滅への道である。三端の好實例である。

學問は、己れの爲めにしなければならぬ。己れは、國家を離れて存在しないか

ら學問は、國家への奉仕であらねばならぬ。孔子は、弟子の子張が、祿を干めることを學ぶ方法について、質問したとき、「多く聞きて疑はしきを闕き、慎んで其餘を言へば、則ち尤め寡し。多く見て殆きを闕き、慎みて其餘を行へば、則ち悔ひ寡し、言尤めすくなく、行悔すくなければ、祿其の中に在り」と、學問と應用の關係を指示して、外面的學問を却けたのであつた。

孔子は、學問を「行ふて餘力あらば、即ち文を學ぶ」といふやうに解釋してゐた。學問は、空理空論に走るのではなく、「實學が重要であるとの趣意である。學問の眼目は、賢者を見ては齊しからんことを思ひ、君に事へては、能くその身を致し、父母に事へては、その力をつくし、朋友には、信をもつて交ることにあつた。このことに對して、懈怠厭倦の情を起すことなく、つとめはげんでゐる人は、すでに學んでゐる人となしたのであつた。然し、文を學ぶことを無視したものではない。孔子は、文學によつて、聖賢の教誨に接し、歴史を讀んで、事理の

歸決を知らなければならぬ。讀書によつて、思想の正否の判定や思考の方法を學ばなければならぬと、子弟を鞭撻した。寢食も忘れ、沈思專念して、眼界を開かうと試みたが、効果がなかつた。默識神通を得意とする野狐禪的哲學は、學徒のとるべき道ではない。文を學んでは思索し、思索しては更に學ばなければならぬ。そして、推理と記憶とを養ふことだ。「吾れかつて終日食はず、終夜寝ねず、以て思ふ。益無し。學ぶに如かざるなり」と。また「學んで思はざれば問し。思ふて學ばざれば殆し」といふのである。

孔子は、かやうな學問的態度をもつて、子弟にのぞんだ。孔子は、子弟を教育するに當つて、子弟自らの開發的努力を要請した。學に志したものは、立志の始めから、日に功を積んで、挫折してはならぬ。勇往邁進の血脈を傾けつくさぬものは、教へるに足らぬものであるとした。人の學問修練の道は、たとへば、「山をつくるが如し。未だ一簣を成さずして止むは、吾が止むなり。譬へば、地を平

ぐるが如し。一簣を覆すと雖も、進むは、吾が往くなり」と、僅少の勞を厭つて最後の一杯の土を自ら運ばぬものは、學問をする資格のないものである。人生に於ける落伍者であると、あくまで子弟の努力精神を求めた。

かやうに、努力を惜しまぬ子弟にして、はじめて開發に價するものである。「憤せざれば啓せず、悻せざれば發せず、一隅をあげて、三隅を以て反せざれば、即ち復びせざる」の指導啓蒙教育であつた。

そして、子弟等の自ら研鑽したことは、次の、吉田松陰愛唱の曾子の句でも知られる。「吾れ日に、吾が身を三たび省みる。人の爲めに謀りて忠ならざるか。朋友と交りて、忠ならざるか。傳はりて習はざるか。」この傳はりて習はざる態度を味讀すべきであらう。

孔子は、「十有五にして、學に志し、三十にして立つ。四十にして惑はず。五十にして天命を知る。六十にして耳順ふ。七十にして、心の欲する所に従ふて、

矩を踰えず」と、自らも努力研鑽してゐる。生涯を通じて、積極的な學問によつて、進歩向上をはかつたのである。孔子の好學精神は「十室の邑、必ず忠臣丘（孔子のこと）が如きものあらん。丘の學を好むが如くならざるなり」に、よつて知らるゝ。消極退嬰的な忠良信義の解釋に満足する徒ではなかつたのである。

學問といへば、今日ではもつぱら、知的意味に解される。知的學問は、西洋の獨占のやうに思はれてゐる。東洋に於ける思想は、知的面の甚だ薄いものとされてゐる傾きがある。知仁勇は、如何にも私知的な悟りの如く解され易い。同じ意を、知情意といへば、何となく、學問的音律を有するやうに感ぜられる。しかし、東洋にも、東洋獨特の哲學がある。孔子の教へも、後代に至つては哲學的に解釋されてゐる。孟子や朱子や陽明をみればわかる。知仁勇は、人生の基本である。知性的にも悟入的にも、大いに探求すべき課題である。

然し、孔子は、子弟を教育するにあつて、人生を行動の現實の姿に於てとら

へて、これを抽象哲學的に、解釋することをしなかつた。そして人間性に絶對の信頼をおいた。即ち人間の創造的生命に訴へて、歴史の生成に寄與することを求めたのであつた。人間を総合的に把握した實踐窮理の教育を、その出發點としたのである。論語には、哲學的に分析した論争は、殆んどないやうである。凡てを仁に包含せしめてゐる。孔子一貫の思想は、忠恕である。然し、孔子の仁とは乾燥した私知的な、心術的な工夫のみに終始したものでなく、多分に知的要素をも包含してゐる。英語の「ヒューマニテイ」と同様に、社會的意義を具有するものである。

孔子の人間性への信頼と、行動を對象とした精神は、「人よく道を弘む。道人を弘むるにあらず」の語が、單的に表明してゐる。人間が人間をきり開くために、制度や組織を作り上げ、文化を創造するのである。棚から牡丹餅式に、道が人を待ちうけてゐるのではない。人が、一切の先決であるとしたのである。

こゝに、立脚した孔子は、「文行忠信」の四綱目を以て、子弟にのぞんだ。常に學問をして、知性の涵養につとめ、行動は、禮法に基準し、情意は、忠信たるべく心掛けねばならぬ。これが、自分の教育の目標であると教へたのであつた。

子路は、孔門下の豪傑であつた。孔子は、子路に六言六蔽といふことについて、質問した。子路は解し得なかつたので、次のやうに説明した。「仁を好んで學を好まざれば、その蔽や愚、知を好んで學を好まざれば、その蔽や蕩、信を好んで學を好まざれば、その蔽や賊、直を好んで學を好まざれば、その蔽や絞、勇を好んで學を好まざれば、その蔽や亂、剛を好んで學を好まざれば、その蔽や狂」と。仁知信直勇剛の六言は、人間としてこれを探求修得しなければならぬものである。然し、之に偏位するときは、愚蕩賊絞亂狂の六蔽となるものである。かくては、折角の徳も、本來の價値を失つて、世の中は、ギョチないものとなつて仕舞ふ。學問知識によつて、その見識を博め、事よろしきに従つて、行動する基繩を養

はなければならぬと、行動に重きをおいた孔子も、學問の必要性をといてゐる。以上で孔子の思想と教育方針の一端は、知り得らるゝと思ふ。述べ来たところによると、孔子は、如何にも謹直頑固一徹の教育者のやうに解せらるゝが、孔子の人生の行樂は、ユーモアを解した融通自在のものであつた。孔子は、「道に志し、徳に據り、仁に依り、藝に遊ぶ」の人であつた。志向は、偉大への道であるとは、トルストイも指摘するところである。既に學問に志したものは、仁徳の發露に心情を傾けて、これを現實に行ふの熱意をもたなければならぬが、趣味藝術は、人間にうるほひと休養とを與へるものである。孔子は、戲言と琴とによつて之を求めた。孔子の琴は、自他共に許すものであつた。然し、學問と行動と趣味とは、個々獨立のものではない。全體的統一がなければならぬ。このことは、履き違へてはならぬと思ふ。かつては、衣箱をやぶり或は紛飾して着用することが、學生本來の面目であると心得た青年學徒もゐたし、身に虱を養生するを以

て、仁の極致であるとした和尚もゐた。六言六蔽の弊に陥つたものである。各國の歴史を考察するに、知の蔽に陥つて衰へた國もある。仁の蔽の爲めに國を奪はれた例もある。私共は、忍従と鬭争の精神を、自らのうちに養成しておかなければならぬ。六言一哲の人間では、堅すぎて窮屈なものになつてしまふ恐れがある。藝に遊んで志操を豊かにして、餘裕をつけることは、人生の理趣として肝要である。

私は、孔門子弟の道を語る序論として、孔子の人間性と、學問的態度を論語によつて、以上の如く判讀するのである。

二、師弟の愛情

孔子には、三千有餘の門人がゐた。そのうち六藝に通ずる者が七十二人、更に

特に優秀なものとして、十哲が數へられてゐる。孔子が、多數の門弟子によつて思慕崇敬せられたのは、その人格と識見の凡庸でなかつたことによるが、師の子弟に對する深密な親愛の情によること、また大きかつたと思はれる。

不世出の人類の教師の影響と感化とは、後世に於て、ますます光彩を放つてゐるが、いつの世でも、高遠な理想と教誨とは、在世當時には認められることの少ないものである。轅軻不遇のうちに、一生を終るものが多い。ソクラテスは毒杯をなめさるゝれ、イエスは十字架にかゝつて消え失せた。孔子と釋迦は、天壽を完うしたが、孔子の生涯は、實に多難であつた。その七十三年間は、席の暖まる暇もなく、兇難の中に、諸國を巡歴し終へたものといひ得る。而も、孔子は子弟を失はなかつた。師は、束脩といふ入門の禮を行つて弟子とした以上は、教へて倦まらず愛してかはらなかつた。そして子弟は師を尊敬してやまなかつた。

今の直隸省に、匡といふ處があつた。こゝで、孔子らの一行は、匡人を暴殺し

た陽虎といふ悪人と誤認されて重圍されたことがある。重圍は五六日も續いたので孔子は生命の危険に直面した。豪傑子路は、劍を持して師を護衛した。敵中にいつて、その入遠ひであることを説服しまはつた。この間にあつて、孔子の最も心配したことは、愛弟子の顔回を見失つたことであつた。敵に虐殺されたものと諦めてゐたが、彼は、三四日目にやつとたどりついた。師は衷心からよろこんだ。「吾れ、汝を以て死せりと爲す」と、心情を訴へて迎へた。顔回は、「子、在ます。回、なんぞ敢へて死せんや」と。師が、なほ無事である以上は、輕々しく大死はせぬ。最善をつくして、師と生死を共にする覺悟であるとの決意を示した。師の愛情と、師への反愛といふべきであらう。

孔子の回を思ふの情は、親切そのものであつた。顔回は、若くして死んだ。七十歳にもなつた師は、彼の死に直面して、「天、予れを喪せり。天、予れを喪せり」と、悲歎の涙にぬれた。遂にゐたゝまらず、ワイ／＼と聲を出して慟哭した

のである。七十にして矩を踰えざる孔子は、喜怒哀樂をその中に包んで節にあつて、時と處に調和して、冷靜に生死の問題でもといてくれるものだと、弟子等は思つてゐた。然るに、師はたゞ慟哭するのみで、それに氣付かなかつたやうであつた。慟哭は滅多にすべきものでない慣習があつたので、子弟等は注意した。師は氣付いて、さうであつたかと答へたが、暫くして、顔回の爲めに慟哭しなかつたなら、一體誰の爲めに泣いてよいのかと切ない情を示した。このことは、論語の先進第十一によつて窺はれるのである。

「子温にして厲し。威あつて猛からず。恭にして安し」とは、子弟等の孔子接觸上の實感である。人間の奥床しきは調和にある。特に、教育者には奥床しきがあつて欲しいと思ふ。教育者の温和は求めるところであるが、女々しくて生氣がなくなつては、駄目である。威嚴は尊重すべきであるが、俺は偉いんだぞと、ふんぞりかへる師には、威服出來ない。恭敬の態度は結構ではあるが、いやにコセ

付かれては、心安さがなくなつて仕舞ふ。嚴肅な教誨の態度と、温情の溢るゝ指導とによつて、子弟はひきつけられるのである。孔子はかやうな人類の教師であつた。

篤學亞聖といはれた顏回は、師の徳を嘆美してゐる。「之を仰げば彌々高く、之を鑽れば彌々堅し。之を瞻るに前にあり。忽焉として後にあり。夫子、循々然として、善く人を誘ふ。我を博むるに、文を以てし、我を約するに、禮を以てす。罷めんと欲して能はず。既に吾が才を竭せり。立つ所ありて、卓爾たるが如し。之に従はんと欲すと雖も、由なきのみ」と。

かゝる師の存在は、偉大である。時流に棹さしたり、喧傳に浮身をやつすことをせず、循々として教へて倦まぬ態度は、不知不識のうちに、子弟をひきつけるものである。その熱意に、子弟はうごかされて、途中で罷めんとする倦怠間隙などは、拂拭されてしまふのである。そしてその才を竭さざるを得ない雰圍氣を充

満せしめることが人類の教師たるものゝ最大の任務である。かゝる雰圍氣からこそ人物も生れるのである。これが、師たるものゝ子弟に對する大いなる愛である。

最近教育界に唱へられてゐる俱學俱進の狙ひは、教育職業の弊をためて、教師と學生とが、融然一體となることにあると思はれる。師弟敬愛の學校生活と學校生活そのものを、道場化せんとするにあると思はれる。

教育の場としての雰圍氣の醸成は、師の眞剣な態度に待つところが多い。人を教へる孔子は、自分の身を省みることが極めて眞剣であつた。世の患は、「好んで人の師となる」ことにあると、警告した。「自ら徳の修まらざる、學の講ぜざる、義を聞いて徒る能はざる、不善改むる能はざる、是れ吾が憂なり」と、身の研鑽に、極めて眞摯であつた。然も子弟に對しては、「仁に當りては師に譲らず」と人の本分を究め行ふ場合には、不必要に人を推遜すべきではない。師に對しても、謙遜するの要はない。堂々と、師に譲らぬだけの熱情と自負心とを持つ

べしと、激勵するのであつた。

孔門には、どんな人が集まつてゐたか。また孔子はどんな人を求めてゐたか。

顔回は、孔門筆頭の弟子であつた。孔子は、不幸短命で終つた彼を評して、「吾れ回と言ふこと終日なるも、遠はざること愚なるが如し。退きて其の私を省みれば、亦た以て發するに足れり。回や愚ならず」「學を好み、怒を遷さず、過を貳びせず」と、學ぶ者の態度として、回を賞嘆してゐる。顔回は、師から教へられたことは、ただハイ／＼と返事するのみである。終日論議しても、馬鹿か利口なのか疑はざるを得ない人物であつたが、退いて二三の門弟と互に相應問してゐるところを見ると、大要に通じてゐて、而も發明創造の新機軸を出してゐる。まことに、學を好んで、過を再び繰返さない、啓發するに足る人物であつた。

顔回は、偉大な師を發見して、生涯を托したのである。一生をあづけた師に對して、批判批評の餘地は、寸毫もなかつた。師道に遠はざること、競々として

努めたのであつた。然し、學問の道は、兩々相打つ切琢磨によつて、向上發展するものである。言を聞いて、直ちに解する俊敏な顔回は、學の伴侶として、もの淋しく感ぜられることもあつた。孔子が、「回や、我を助くる者にあらず」と云つたのは、この意味に於てであらう。

孔子は、同學の士として、狂狷の徒を求めた。「中行を得て之に與せざれば、必ず狂狷か。狂者は進んで取る。狷者は爲さざる所有り」と。顔回のやうな、中庸の士は、仲々求めらるべくもなく、もの淋しいことでもある。かど／＼して、つゝか／＼つてくる子弟も、教へるに價する。狂者は、志向高く、勉學に熱意を有するものであり、狷者は、萬事不足な點はあるが、理を堅く守る性格をもつてゐるものである。かやうな人と疑問應酬して相激勵することによつて、道に進ましめることが出来るし、また、孔子を斯道に於て助け長ぜしめるものであるとしたのである。私共も、青年に狂狷の徒たれと、いひたいのである。特色と生氣のな

い青年は、極めて取扱ひ難いのである。

子夏といふ富有な弟子があつた。子夏の富有は、孔子の軍資金をみついたといはれてゐる。かつて、子夏らしい質問をした。「貧にして諂ふことなく、富みて驕ることなきは如何」と。師は「未だ、貧にして樂しみ、富みて禮を好む者に若かざるなり」と答へた。子夏は、直ちに語をついで、「切るが如く、瑑ぐが如く、琢つが如く、磨ぐが如し」と詩にあるのは、先生の云はるゝ意味であるかと、反問した。孔子は、「始めて與に詩を言ふべきのみ、諸に往を告げて來を知る者」であると、鼓舞した。

孔子は、心廣く體胖かなる積極的工夫を、子弟に求めた。貧富夫々の立場において、消極的態度に止まつて、卑屈驕慢にならぬやうにと、注意した。子夏はこのことに氣付いて、切瑑琢磨の詩の章句をひいて、師の推奨にあづかつたのである。

孔子は、よろこんで、子弟等の試験臺になつた。儼然たる師ではあつたが、子弟は、心安きをもつて接した。弟子の子游が、武城といふ片田舎の宰となつた。師は、弟子の統治ぶりを視察にでかけた。武城には、盛んに絃歌がきこえてゐた。孔子は、笑つて隨行の弟子等に云つた。「鶏を割くに焉んぞ牛刀を用ひん」と。禮樂は、國の八釜敷い法式である。こんな片田舎にて絃歌を適用するのは、すこし大袈裟であるぞと、子游の眞面目さを喜びつゝも、いゝさか笑はざるを得なかつたのである。子游は、愕然とした。不満な顔付きで、「昔偃(子游)や諸れを夫子に聞けり。君子道を學べば、即ち人を愛し、小人道を學べば、則ち使ひ易きなり」と。師曰く、「二三子、偃の言是なり。前言は之に戯るのみ」と。

指導者としての態度には、事の大小あるべき筋合ではない。爲政者たる自分が禮學に依つて、人民を愛してゐる。人民はこれによつて、上下尊卑の別を知つてくれるのである。かくして、統治の實もあがるのである。然るに、私の誠意を笑

はれるとは、意外千萬であると、子游は師にただしたのであつた。孔子は、その非を悟つた。前者は戯れであつた。戯れにも時と場合がある。自分が悪かつた。許してくれたと、教へ子にあやまるのであつた。

孔子は、よく戯言をいつた。戯言のうちにも、子弟の教育を怠らなかつた。

子路は、その勇武に於て、孔門一等の人物であつた。しかし血氣にはやつて、思慮を缺くことがあるので、師から度々注意されてゐた。然し、師の厚い寵愛をうけてゐた。師の行くところには、必ず隨行した。宿所に於ても、師と共に別室に入る程の信頼があつたと、いはれてゐる。子路も、亦勇武を以て任じ、匡人の難に際しても、來敵必殺の意氣で、敵前に劍舞を舞つた。師は、よしやれと、自ら琴を弾いて、これに合はすのであつた。

孔子の念願は、有道の君子に事へて、その國に仁政を布くにあつたが、時にあはず、佞臣の冤言によつて、落着く暇もなかつた。諸國を遍歴した孔子も、いさ

ゝか悲觀し嘆息して、子路に相談をもちかけた。自分の理想とする道は、どうも中國では、行はれさうにもない。筏に乗つて、絶海の孤島へ隱遁したいものである。それにしても、子路がついて來てくれなければ、土着民の征服もおぼつかないと思ふ。汝は、どんなことがあつても、自分と行動を共にして呉れるであらうなあと念を押したのであつた。

子路は師は果して、自分の眞價を知るものであると、大得意になつた。この子路を見た孔子は、少し砂糖が利きすぎた。このうへ子路に武勇を發揮されては、何を仕でかすか分らぬ。さうなつては、大いに迷惑を感ずると思つたので、孔子は、子路にお前はそれより外に、取柄がないからなあと、たしなめたのであつた。論語に曰く、「道行はれず、筏に乗つて海に浮ばん。我に従はん者は、其れ由かと。子路之を聞いて喜ぶ。子曰く、由や勇を好むこと我に過ぎたり。取り材る所なし」と。

子路にはさらに逸話がある。子路は、柄になく、琴を一所懸命に弾じてゐた。その音律が、孔子の耳に入つた。これは殺伐の調だ。子路には、なほ亂勇の弊が残つてゐる。多年教へた甲斐もない。何故に、わが學の本義を體得しないのであるか、彼の琴の如きは、吾が門下に於て彈すべき資格はないものであると、評した。蠻勇得意の子路も、この師の言を聞いて大いに反省した。ために食事も中絶して、瘦せおとろへたとまでいはれてゐる。同門の弟子の間に於ても、このことが話題になつた。先生に斥けられるやうな子路は、最早われらの年長者として、尊敬するに價しないと、輕蔑するものもできた。孔子は、この度は少し藥が利きすぎたと思つたので、子路の爲めに、大いに辯じ、また子路を激したのであつた。たゞ子路の琴は、その奥義にはいま一步といふところだ。自分は、子路に對して最上級を求めたのである。琴も、同門のうちでは、立派な方である。子曰く、由く、由の琴を鼓する、奚ぞ、丘の門に爲さんと。門人子路を敬せず。子曰く、由

や堂に升れり。未だ室に入らざるなり」と。

孔子の、子弟等への愛情は語つてつきない。意長くして、筆の短きを歎ずるのみである。孔子の眞愛は、すべてを包容する。子弟は、師の難にはたまた病に際しても、心根を傾けて、これを護りつゞけるのであつた。然し、孔子の愛を誤解してはならぬ。孔子の眼目は、仁であり、禮である。正邪曲直は判然としてゐる。「怨を匿して、其の人を友とする」やうな態度は、恥辱とするところであつた。子弟の師に對する尊敬は、當然のことであるが、その極まるところは、卑屈な服従や便佞に陥ることがある。孔子は、こゝに注意して、仁に當つては、師に譲らぬ態度を、子弟に求めた。このことは既に述べたところである。

水に住む魚の水を知らぬやうに、空を飛ぶ鳥の空を關知しないやうに、孔子の眞愛に、つゞまれた子弟等のうちには、師の教へと愛の意義、解し得ないものもあつた。孔子は、怪を索めたり、奇説を用ひて、人を驚嘆せしめるやうなこと

は、敢へてしなかつた。また老子のやうに、深遠な哲理をも解かなかつた。これを現實の政治と生活の上に求めて、語黙動靜の間に、實踐躬行することを、教育の主眼としたのである。學問を、悠遠の彼方にのみあると思つてゐた門人たちは、此の點に於て、師に不満を感じた。そして門人たちはその未熟な爲めに、深遠高尚な學理に接し得ないのではないか。早くその教理を授かり度いとの希望を訴へるものもあつた。

孔子は、「二三子、我を以て隠すと爲すか、吾れ、爾に隠すことなし。吾れ行ふとして、二三子と共にせざるることなし。是れ丘なり」と。これまた、私共の味ふべき言であらう。

三、適性即妙の教育

孔子一貫の理想は、忠恕の道である。即ち仁の實現にあつた。孔子は、その本質を探求し、その實現の方法と手段を、子弟と共に考究するに當つて、子弟個々について、その説明を具にする對人的教育方法によつた。子弟の性格傾向を明察把握して應時即妙の指導を念願とした。

前にも述べたやうに、孔子の教育方針は、努力開發主義であつた。そして、指導者としての孔子は、孔門下に於ては、自らの研鑽によつて、想を練り、體を養はねばならぬとの雰圍氣を充滿せしめた。「之を如何せん、如何せんと云はざるものは、吾未だ之を如何ともするなきのみ」と、熱のないものは、うつに足りないものとなしたのである。かくて孔門は、熱の坩堝としての教育の場となつたの

である。

この場に於て、子弟は懸命に師に體當りした。度々例にあげた顔回は、「其の進むを見て、未だ、止まるを知らず」と、その日進月歩の學問を賞讃されてゐる。而も彼ですら、吾が才を竭くして、之に齊しからんと欲するも由なく、立つ所ありて、卓爾たるが如しと、嘆息をもらしてゐる。卓爾たる師のもとに、罷めんとしてやむ能はざるやうな熱の坩堝が、孔門の雰圍氣であつた。眞劍になればなるほど、人の個性もますますよく知らるゝのである。

孔子は、かつて陳蔡といふところで、大厄災にあつた。これは大國の楚が、孔子を聘へて國政をあげようとした時、孔子が楚に用ひられては、陳蔡は危険に陥るものとして、その一行を阻止したために、起つた厄災であつた。糧道を絶たれた一行は、食物も飲料もなくなつて、動けなかつた。一行は病人のやうになつたが、孔子は平氣で得意の琴を弾き、その間には教育もしてゐる。

血氣の子路は、先づ師に詰問した。有道の君子は、天報の豊かなるべき筈であるのに、師のこの窮狀は、何としたことであるか。君子も、亦窮することがあるかと。孔子は平生の温顔で、「君子固より窮す。小人窮すれば、こゝに亂す」とあわてものゝ子路に、落着きを教へた。

傍にゐた子貢に對しては、「予を以て、多く學んで之を識るものと爲すか」と質問した。子貢は、「然り」と答へたが必ずしも同意でない師の態容にあつたので、「非なるか」と反問した。師は、「非なり。予は、一以て之を貫く」と、忠恕の道が基本であることを強張した。けだし、子貢は天性聰敏で言語學理に長じてゐたが、人格徳行の修行を輕視する傾きがあつたので、この苦難が患ひして學の根本を忘れ、散漫的になつてはならぬとの注意であつた。

孔子を信頼してゐた弟子も、この時ばかりは、懼りの色をたゞよはせた。孔子はこの機會に道を説かうとした。弟子に呼びかけて、見にあらず虎にあらず、彼

の曠野にしたがふとある詩の言葉を引用して、一體こんなことになるのは、自分の道がわるいからであるかと、質問をした。

子路は、仁と智の不足を訴へた。子貢は、師の道が、あまりに遠大であるとなした。孔子は、有爲の青年は修行の過程に於て、道を修めないうでただ容れられることばかりを求めてはならぬ。伯夷叔齊のやうに、仁を求めて、仁を得たりと心構へが必要である。良農は能く穀物を作ることには知つてゐるが、とりいれすることができない。良工は、細工は巧みであるが、人の氣もちに順ふことができない。君子はよくその道を修めて、綱領を統一してゐたが、世間はなか／＼それをいれようとはしないものである。然し、修行時代には、そんなことを氣にかけずたゞ信じて邁進すればよいのであると、弟子にあへて氣概を求めたのであつた。顔回に至つては、その道の修まらないのは、自分の醜であるが、實力を修めて用ひられないのは、その國を有つものゝ醜である。人才登用のよろしきを得ない

のは、國の罪であり、國の損であるとの見解を述べた。これを聞いた孔子は、欣然として笑つて、顔回が金もちであると、この自分は、その宰となつて働きたいなどと、戯言を云つた。

孔子は、當時を追懐して各弟子を歎辭してゐる。「德行には顔淵(顔回)、閔子騫、再伯牛、仲弓。言語には、宰我、子貢。政事には再有、季路(子路)。文學には子游、子夏」と。所謂、十哲と稱せらるゝ門人の特長を述べたのである。

また別なところで、「柴や愚なり。參や魯なり。師や辟なり。由や喭なり」と弟子を評してゐる。孔子のいふ、愚と魯と辟と喭には、各々表裏二様の意味があるのである。孔子は子弟の缺點のみを指摘したのではない。短所は即ち長所たり得るものである。個性を無視して、矯正を強ひるものではなかつた。愚ではあるが、その愚直のところを認めた。魯鈍であるが、その輕卒でないところを賞した。かたよる辟があるが、よく人の長所を採る態度を買つた。剛腹であるが、卒

直な點に感服しての評である。

短所缺點は、同時に長所美點ではあるが、それは、指導と鍊成のよろしきを得ることが前提でなければならぬ。人類の教師は、こゝに萬善の注意を拂つた。子弟の自覺を喚起して、倦厭の情を懐かしめないやうにとめたのである。

孔子の評したやうに、曾子(參)は、魯鈍で聰明才智の人ではなかつた。然し、彼は誠實真摯な態度で終始かはらず師に學んだ。師はこの點に矚目したのである。その成果は、明かに論語に認されてゐる。即ち「吾日に吾が身を三省す。人の爲めに謀りて忠ならざるか。朋友と交はりて信ならざるか。傳へて習はざるか」と。傳へて習はざるの一句は、私共學徒の翫味すべき語である。更に彼は、謙讓以て學に精進した。「能を以て不能に問ひ、多を以て寡に問ひ、有れども無きが如く、實つれども虚しきが如し」と。また彼の人としての理想は、「六尺の孤を托すべく、以て百里の命を寄すべく、大節に臨みて奪ふべからず」。「士は

以て弘毅ならざるべからず。任重くして道遠し。仁以て己が任となす。亦重からずや。死して後止む」と。これは正に、人生生活の理趣として金科玉條である。死して後止むの精神と、六尺の孤兒を托されぬやうな信頼のないものは、曾子の語るに足らぬ人であつた。曾子が、顔回、子思、孟子と共に、孔子の四配として、尊崇せらるゝ所以もこゝにある。

教育のことは、單に學說理論を傳へることにあるのではない。教師は、國家の至寶である青少年を托されてゐるのである。父兄と國家とは、六尺の孤を教育者に托してゐるのである。師弟關係の第一認識は、こゝにあらねばならぬ。豊臣秀吉は、死に當つて、六尺の孤たる秀頼を托すべき人が得られなかつた。秀吉は、六尺の孤を托すべき人物の養成を忘れたが爲めに、彼の儕輩は相排して離散した。かくて、關ヶ原の一戦に滅亡したものと叫ぶ。

孔子は、尊大の氣を裝ふて、大言壯語に目を送つたものではない。「富にして

求むべくんば、執鞭の士と雖も、吾も亦之を爲さんと、理否の明かなときは、賤役も厭はなかつた。「之を沽らんかな、之を沽らんかな。我は買を待つ者なり」と、我は天下の賣物だ、しかし安くは買りたくない、戲言と嘆息のうちに、自分の自負を、子貢に話したことがある。國家の危急存亡をみては、安閑として、ひとり自ら高くむさぼり過すことは、許されなかつたのである。

かつて、隱遁者流の仙客が、孔子を笑つたことがある。仁義仁義と、碌々として力んでばかりゐるが、少しは身の分存と社會狀勢といふものを考へたらどうだ。こゝに至ると孔子も大したことはない奴だな。川が深く世の中がうるさいならば、上着をぬぎ、袴を解いて渡つたらよいではないか。浅いところは、裾を掲げた丈で渡れるではないかと。

然し、人類の教師の念願は、己れを虚しうし犠牲にして、有能の士を作る育英にあつた。曲學阿世は容易なことであつたが、方便的教育では人は作らるべくも

ない。明日の國家を背負ふ青年には、「斷じて行へば、鬼神も之をさく」の氣概を植ゑつけねばならぬ。孔子の精神はこゝにあつたので、その注告に耳を傾けなかつたのである。

孔子は、一身を教育の爲めに犠牲にしたが、子弟にこれを強ひはしなかつた。弟子等の推舉立身には、常に留意した。季康子といふ大官が、子路、子貢、再有を登用しようとして、その人物如何を孔子にたづねたことがある。孔子は躊躇するところなくいつた。子路は果斷で、政務に遲滞する恐れがない。子貢は穎悟で事理に通曉してゐる。再有は心思が精巧で、多能である。何れも爲政者として遜色のないものであると、各々の特長をあげた。これは論語雍也編にしるされてゐる。

孔子の人物省察の目標は、どこにあつたのであらうか。「其の以てする所を視、その由る所を觀、其の安んずる所を察すれば、人焉んぞ庾さんや、人焉んぞ庾さ

んや」と。人物觀察の照準をこゝにおいた。

世には、精神に重點をおく人もある。機械的に唯物的に、行動する人もある。何れにせよ、濃淡の差はあるが、人は自己の意識作用によつて、活動を展開發動するものである。自己發展の形式は、行動にあらはれてくる。行動は具體的であり、直接的である。よつて先づ第一に、外面にあらはれた行爲を視察する。そして、次には行爲の由つて來る動機を探索する。これで、人物の大要は知り得らるるものであるが、人の理想として安んずるところを透察しなければ、保證はでき兼ねるといふのである。行動と動機とが如何に立派であつても、その安んずるところが、利貪であり、名譽であり、安逸にあるならば、境遇と誘惑によつて、變節するおそれがある。然し、以上の三段階によるときは、人は本性は粉飾しようとしても、隱匿することはできないものであるといふのである。

既に述べたやうに、孔子は人の缺點を指摘することを樂しみとするものではない。

い。道學者流の頑固一徹の士でもない。それかといつて、所謂、好々爺でもなかつた。郷原は徳の賊なりとして、厭ふところであつた。正邪曲直の取扱ひは、極めて適切嚴正であつたが、また慈愛の師でもあつた。

ある時、葉公が、郷黨の正直者の直躬を賞讃したことがある。直躬は、彼の父が、他家の羊が迷ひ込んだのを幸ひにして、盗みとつたことを訴へて出た。直躬の名にたがはず、果して正直者であると、近隣の噂にもなつた。

これを聞いた孔子は、「吾が黨の直き者は、是に異なり、父は子の爲めに隠し、子は父の爲めに隠す。直きこと其の中にあり」と、衆論をしりぞけたのであつた。孔子の意は、罪は罪であるが、父子の親愛、人情の美は天理である。この天理にそむいて、何の得るところがあるであらうか、といふにある。これは、權道を解いたのであつて、父子共謀の盜心を是認するものではない。

道には常道と權道とがある。正道と變通の道がある。たゞ一筋に嘘をつくな、

泥棒するな、正直なれと教ゆるばかりでは、複雑怪奇の世に於て、戦闘の世界を渡つてゆく上に於て、間に合はぬことがある。夫々に備へて、正常権變の知覺を發揮しなければならぬ。かやうな人を達人といふのである。孔子の求めた最後の弟子は「與に共に學ぶべし。未だ、與に道に適くべからず。與に道に適くべし。未だ與に立つべからず。與に立つべし。未だ、與に權るべからず」とあるやうに、與に權り得る人である。秘傳奧義を傳授し得る深切一體、眞摯の師弟關係を、企圖したのである。道の道とすべきは、常の道ではない。名の名とすべきは、常の名ではない。道は實在であつて、一つである。何々主義とか、何々説とか云ふ説明に、こたはつてはならぬといふのであつた。

孔子の目的がこゝにあり、人物の觀察は、上記の方法によつたので、表面的な行動によつて、子弟の性格や將來を決定するやうな、輕卒はなかつた。つねに心のおきどころを推察した。また一時の窮達などは、問ふところではなかつた。

「雍や南面せしむべし」と、生れつき鷹揚で高貴な仲弓(雍)は、人君になる資格があるといはれたことがある。その仲弓が、桑伯子のことをたづねた。桑伯子の人物は、簡易で勿體ぶらず、煩擾の風がなかつたので、彼も亦南面さしてよいと、孔子は評した。不審に思つた仲弓は、重ねて質問をした。舉措を敬恭にして行事を簡素に行ふときは、衆人は其の徳に服して、煩累に苦しまず、従つて業績はあがるものである。然るに、伯子は老子流の人物である。身を持つことは放膽で、禮儀に無頓着である。かやうな者が、師の評せらるゝ如く、國の行政運営の掌に當つて、簡素を旨としたならば、放漫政策に陥るのではないか。簡素は寛略であつて、粗漫ではないと思ふと。

孔子は、仲弓の云ふ通りであると答へたので、前言は誤りであるかとの問ひに對して、さうではない。たゞ伯子については、泛く大體を云つたまでだ。お前が精細に人の主たるものゝ資格を研究して、節度ある簡易を主張するのは、正しい

論であると賞揚した。孔子は見るべきところは、正確にみてゐたのである。

公治長は、嫌疑によつて投獄された。然し、その罪は人の爲めにはかつたことに起因してゐたので、動機は純白であつたし、平素は恥を忍ぶ徳行人でもあつた。孔子は、公治長を見込んで、その娘を妻はした。子弟への愛情と意氣とは、大いに鑑るべきであらう。「公治長を謂ふ。妻すべし。縲紲の中に在りと雖も、その罪に非ざるなりと、其子を以てこれに妻す」とある。

子貢、子路、仲弓は、孔門十哲の人々である。三人の弟子が、一國一城の主となる心掛けについて、教へを乞ふた。今の世に適用すれば、一國の大臣となり、會社銀行の重役、學校の長、乃至は一團體の幹部や一家の主人となつたときの心得について、ただしたのである。三人に對する師の解答は、夫々異つてゐる。孔子はどのやうな意味に於て、その解を異にしたのであらうか。

一國一家には、夫々の主體性がある。その主體性を發展強化する具體的方策の

異なるべきは、當然のことである。然し、孔子の答は、このことを考慮に入れたのではない。上に立つ者の精神的態度を主題としたのである。政は公的なものであつて、私的嗜好物ではない。私的感情や、個人の習僻をさしはさむべきでない。反省自覺して、滅死奉公の誠をつくすべきである。然し、天與の個性は、意識すると否とに拘らず、善惡兩方面に於て、あらはれるものである。そして、「上の好み行ふところは、下これを倣ふ」のである。而もこの傾向は、悪い方面に特に強いものである。孔子は、このことを注意したのである。

弟子の性格については、これまで度々觸れたが、順序としてもう一度述べたいのである。重複するところがあつたなら、恕して貰ひたいのである。

子貢(賜)は「賜や賢なるかな。それ我は即ち暇ならず」と、孔子に評せられたやうに、口才に長じてゐた。頭腦は明晰で、立論は透徹してゐた。金持である上に、應對に如才がなかつた。世にいふ、才と金と辯に物をいばせようとする傾き

があつた。それにたのむところが強かつたために、信用喪失の憂ひがあつた。

その子貢の政を問ふたに對し、孔子は答へた。「子貢政を問ふ。子曰く、食を足し兵を足し、民をして之を信ぜしむると。子貢曰く、必ずや、已むことを得ずして去らば、斯の三つの者に於て、何をか先にせん。曰く、兵を去らん、必ず止むことを得ずして去らば、此の二つの物に於て、何をか先にせん。曰く、食を去らん。古より皆死あり。民信なければ立たず」と。

食とは、衣食住は勿論のこと、これが生産施設や運搬機關等を含めた廣義のものである。國民生活の基本條件である生産力の確保と、國土を防衛し、敵の侵略に備へる武備の充實に加へて、此の政治家に従ふて居れば、大丈夫であると民を信頼せしめることの三つが、政治の眼目であるとした。子貢は、何かの都合で、この中一項目に限定しなければならぬ時は、何が大切でせうかと聞いた。孔子は、衣食より軍備より、民が信じて呉れると云ふ事と、國民全體が共同一致すると云

ふことが、大切だと云はれた。このことは、子貢の急所をついたばかりではなく實に名言であると思ふ。政治家に信用の無い間は、民はいつも不安に驅られてゐるものである。

子路の勇力才藝は、自他共に許してゐた。彼の勇力は、到る處で師を護つたのであるが、子路は、「暴虎馮河、死して悔なき者は、吾は與せざるなり。必ず事に臨んで懼れ、謀を好んで成さん者なり」と、師から血氣の勇を戒められ、慎重な思慮を求められてゐた。

孔子の政治に関する子路への解答は、極めて簡單である。「之に先んじ之を勞せよ」の一言であつた。子路は、はつきりしなかつたので、もう少し詳細な具體的な事を承り度いと、請ふたが、また「倦むこと無かれ」の一言であつた。先んじて勞するとは、人に卒先して事をする、そして其の事が濟むと、御苦勞であつたと勞ふてやれ。それが人の服する所以であるといふにある。

子路は、義に勇み意氣に感ずる徒であつたが、進むこと疾く、また退くことも疾くて、熱し易く冷め易い傾向の男であつた。孔子が、先と勞との一事で事足りる。倦むことなかれと、誨へたのは、即妙の指導といひ得るであらう。

先んじて勞するの精神は、いつの世にも、指導者には大切な心構へである。白河樂翁は、かつて幕府の老中として、節儉令を出して、華美虚飾を禁じた。傍ら自らも卒先して禪の長さを半減するほどの熱意をもつた。これが即ち彼の越中の守に因んだ、越中禪の起りであることは、卑近な一例であるが、大東亞戦争遂行完徹の爲めに、全面的に消費規正を要請せらるゝとき、特にこのことは痛感せらるゝのである。

仲弓は徳行人であつたが、彼の父に稍々賤劣な素行があつたので、いたく氣に病んでゐた。そして、彼の事へた季子は、庸劣の人であつた。自分を省みることが薄くて、人を責めるを得意とした。部下を怯氣さして、罪過を作つては、樂し

むといふ癖の人であつた。仲弓はかやうな状況のもとにあつた。

孔子は、仲弓がその弊に染まらぬやうにと、注意してゐたので、政治家としての心得にも、「有司を先にし、小過を赦し、賢才を擧げよと、曰く焉くに賢才を知りて之を擧げんやと。曰く、爾が知るところを擧げよ。爾が知らざるところは人其れこれを捨てんやと」と、人才登用の法と、小過を捨ておくの雅量を教へたのである。勝海舟が初めてアメリカに行つて歸つた時、慶喜公から何か珍らしい土産話をと、所望せられたことがあつた。慶喜のたつての質問に黙つてゐた勝は、彼方では偉い奴が上にあると、答へたさうである。今日のアメリカのことは知らぬが、勝の放つた言葉は、慶喜に對しては、意味深遠な諫言であつたらう。弟子の性格と對人教育を述べようとして、多少説教めいたことは、相濟まぬと思ふ。意味をはつきりしたいとの念願であつた。

孔門に於て、最もよいと思はれることは、師弟間に、なんの變哲もなかつたこ

とである。うちとけた交流にあつた。孔子は機會あることに、好んで弟子に志をいはしめた。弟子は己れを卒直にさらけだした。孔子の生涯は、隱遁を許されなかつたことは、前にもふれた。然し、孔子の人間的な情趣は、果して何處にあつたのであらうか。

ある時、孔子を圍む座談會が催された。孔子は、俺がお前等より一日の長がある故に、謹んでおとなしくしてゐるやうだが、俺を友達と心得て、一つ思ひ切つて其の志を云つて見ろ。お前達は平生己れを用ふる者がない、己を用ふるものがあつたら、偉い事をして見せると、高言を吐いてゐるやうであるが、何をするかそれを一つ云つて見ると、話をもちかけた。

子路は一番にとび出した。寡兵を以て艱難とたたかひ、大勇を揮ふて、三年経たぬ中に、偉いものにしてみせると、その本領を發揮した。或る者は殖産興業を盛んにするといひ、他のものは、宗廟を祭り、先王の道に従つて、小相となつて、

國を治めてみたいと謙遜した。一人會哲に至つては、その傍で瑟を弾いて志を述べようとしなない。師に促されても、薩張り志が違ひますと濟ましてゐた。師の再三の督促で、やつと口をひらいた。みんな同僚は陸軍大臣とか産業大臣とか文部大臣とか云ふが、私は氣候がよくなつたら、新調の春服をきて五六人の弟子や子僧たちと、温泉へでも行つて、よい氣持ちで會心の詩でも作つて、家に歸つて來たい。これが私の希望ですとのべた。

孔子は喟然として、吾は會點(會哲)に與せんと、嘆じたのであつた。くはしいことは、論語先進第十一にある。

論語各章はすべて、對人指導の刻印といつてよい。そして、その練磨は事上の練磨であつた。それによつて、師は各人の天性を長養矯正することにとめたので、弟子等は、個性を歪曲せらるゝことがなかつたのである。その適例は、次のことから云ひ得る。子路と冉有が「凡そ師より聞き得しことは、これを行ふ」

てよろしいかの質問に對して、冉有には「行へ」と答へたが、子路には「父兄在ますことあり」よく／＼熟考して然る後に行へと注意したのであつた。

孔子は、熱情の持主であつた。熱情が弟子等をひきつけたのである。「その人となりや、憤りを發しては食を忘れ、樂しみて以て憂を忘れ、老の將に至らんとするを知らず」とは、孔子自らの評言である。

要するに、孔子は、實在の道は畫一の教育によつて得らるべきものではない。時處位によつて、人の力量に即した懇切なる指導が必要であるとしたのであつた。

四、實力の養成

實行の伴はない、口頭の禪をといへども、何の役にもたたない。修練に鍛錬をかさねれば、かよわい一指でも、天龍を動かすことができる。一指の修練を、單一

なるものとして、忽がせにしてはならぬ。事上一指の練磨は、實力養成への道である。實力は、自信の根基となるものである。安心の術である。教化顯現の主動でもある。

孔門の子弟は、もつばらこのことを勵んだ。政治に於ても、殖産に於ても、剛毅な膽力の點に於ても、行くところ、人の信頼をうるに足る心術の修練に精進した。實力の培養は、孔門の大きな課題であつた。

孔子は、博識を以て知られてゐるが、生れながらの偉大ではなかつた。その幼時は凡庸の一兒であつたといはれてゐる。孔子は、三歳で父を喪ひ、二十四歳で母にわかれた。孔子は苦難の生活を経験した。鄙事に多能であつたのは、その苦難の生活を物語るものである。これがためおよそ縁の遠いと思はれる會計の事務官にもなつたことがある。そして、會計當るのみと、いはれてゐるから、忠實に、その場に於ての力を發揮したのであらう。

實力は、努力の賜である。「我れ生れながらにして、之を知るものにあらず。古を好み、敏にして之を求むるものなり」と、孔子はその生知でなかつたことを告白してゐる。歴史傳記を讀んで、國の興亡と人生の歸趨を、敏碁に求めたのであつた。

薄志弱行の觀のあつた、冉求といふ弟子が「子の道をよろこばざるに非ず。力足らざればなり」と、辯明したことがある。孔子は、「力足らざるものは、中道にして廢す。今、なんぢは晝す」と、叱りつけたのである。力が足りないなどいふのは、斃れて後止んだ時のことである。懸命の勉強も、修練もせずして、先生の道にはおよびもつかぬと思ふのは、はじめから自分は駄目だときめてかゝつてゐるのである。人間の眞價を知らない、自暴自棄の徒である。精神一到、なにことかならざらんの熱と意氣とをもつて、學問の道には精進すべきであるとの勉學態度を勧めた。孔子が、このやうに人間性に絶對の信頼をおいた努力主義の人であ

つたことは、既に承知のところである。

「學ぶことは、及ばざるが如くす。猶ほこれを失はんことを恐る」のが、孔子の學問修業に對する心構へであつた。孔子は、十有五にして學に志してから、七十三歳で死ぬるまで精勵したのである。實力の養成は、一生涯のことである。

學徒は、學校にあつては實力の養成に、心根をつくさなければならぬが、社會に出ても、營々として努むべきである。安易輕捷な道を求めることは勿論、與へられたる地位に、たゞ不平を鳴らし通すやうでは、指導者となるべき青年の資格を欠くものである。また偉大への道ではない。場に於ける責任と力とを、發揮するやうに構へなければならぬ。「位なきを患へず。立つ所以を患ふ。己れを知ることなきを患へず。知らるべきことを爲すことを求める」の語は、孔子の子弟への、處世上に於ける警告である。

冉有は、力の不足を訴へて叱られたが、顔回は、こゝでも嘆賞されてゐる。こ

れにつけて情らざる者は、それ回か、「惜しいかな、吾れその進むを見るなり。未だその止まるを見ざるなり」と。戒懼力行して、情らぬものにして、はじめて孔門第一等の人物となり得たのである。

實力の養成は、學ぶ者の真剣な態度を第一條件とするが、青年の一生を托された教師の輕忽驕慢も許さるべきでない。「教へざる民を以て戰ふ。是れこれを棄つる」のである。「教へずして殺す。之を虚と云ふ」のである。平生の教育鍊成を輕卒にあつかつたり、技術進退の法を粗略にしてをりながら、青年の完きを求めるのは、木に寄つて魚を求めると同様である。師弟一體となつた、血腸吐心の修練こそ、教育の本意義であると思はるゝ。

孔子は、ただの學究徳行の人ではなかつた。その膽力と勇氣に於ても、みるべきものがあつた。

孔子は魯の國に生れた。當時、振興せんとした魯を、隣國の齊はよろこばなかつた。然し、魯は四圍の關係から、齊に誼を通することを希望してゐた。齊は、これに乗ぜんとしたのであつた。

齊の太夫の黎鉏は、一計をたくらんだ。齊魯兩國の君主を爽谷（今の山東省にある）に會して、誼盟の義を結ばうとした。然し誼盟は表面の理由であつて、眞意は、魯君を屈從せしめて齊の國勢を張るの陰謀であつた。

魯君に隨行して、外交に當ることになつた孔子は、「文事あるものは、必ず武備あり。武事あるものは、必ず文備あり」と、諸侯が國を出る時は、必ず文武兩道の備へをなすべきであると進言した。そして、官を具へて、司馬を従はすことにした。

君子の會盟には、八釜しい禮法があつた。この會盟もその形式によつて行はれることになつた。會場には三段の土階が設けられてある。兩國の君主は、最上階にのぼつて、一定の儀禮を終へたのち、酒の献酬に移つた。酒の酣なるに及んで

武力に鳴る萊人が劍戟を持って、をどり出た。魯君を劫かして、爾後の交渉を有利に展開せんとする太夫の計略であつた。

萊人の如き階級は、このやうな君主の會合には、禮儀として出席を許されてゐなかつた。この舉動を見た孔子は、最上階に趨りのぼつて、大音聲をはり上げた。萊人は盟約の場所に来るべきにあらず、武器を手にする夷狄の樂を奏するとは、何事であるかと、叱咤した。そして、無禮者の萊人の處分を願ひたしと、齊公に迫つた。臣下の三段目にのぼることも違法であつたので、齊の太夫は、家來に命じて、これを引き降さうとしたが、孔子は更に動かなかつた。齊の景公は、孔子の鋭い追求と膽力に壓せられて、空恐ろしくなり、またその非禮は恥しくもあつた。仕方なく、兵士の退散を命じた。かくて、太夫の第一策は失敗に歸したのであつた。

切齒扼腕した太夫は、第二案の計略にかゝつた。魯君の許しを得て、宮中の樂と

いふものを奏するやうにした。然し、これまた、卑俗侏儒の樂で、正式の場所に於て奏すべきものでなく、無禮極まるものであつた。太夫は、これによつて屈辱を與へようとしたのである。孔子は再び憤激して、段上にかけて、匹夫の分際で諸侯に無禮を加ふるものは、罪は死刑に當る。無禮者の處分を請ふと、齊公につめよつた。齊公は躊躇した。孔子は、司馬などをかへりみて、自ら處分しようとする氣配を示したので、齊人は法に従つて、侏儒を處罰せざるを得なかつた。

魯國は、孔子の識見と膽勇によつて、國威を維持し、君の危急を救はれることが出来た。これに反して齊國は、國際信義を無視した件によつて、列國の信用を失墜した。齊公は後悔して、魯は君子の道を以て、その君を輔佐するが、汝等は夷狄の道を以て寡人に教へ、大失態を演ぜしめた。善後策を講ぜねばならぬが、その無禮は如何にすればよいかと、左右を顧みた。士太夫も今や仕方なく、かつて魯から侵略した土地を返還して、罪を謝することにしたのであつた。

「文質彬彬々として、然る後に君子なり」とは、指導者の資格として、孔子の規定するところである。彬彬たる文質は、現下の日本の最も要請するところである。私共青年學徒は、知性の探求と教養の修得に並行して、意志の鍛鍊と不屈の精神によつて、勇膽剛毅の氣象を養つて、健民的指導者とならねばならぬ。

五、孔子の宗教思想

孔子の宗教思想については、論義が多いやうである。孔子に宗教なしとする論が、かなり有力である。論語を通じて、宗教に關すると思はれるものは、至つてすくない。そしてその言論は、否定的な語調をもつてゐるものもある。然しこれを以て、孔子に宗教心なしと斷定するのは、尙早と思はれる。論語の言葉には表裏二様の意味の含まれてゐることが多いのである。私は、孔子の言外の眞意を

穿鑿してみたいのである。

孔子は、「怪力亂神を語らな」かつた。怪と力と亂と神のことは、いつの世でも、人の好んで語るところであるが、孔子は、怪異勇力悖亂鬼神は、正道のものではなく、風教上に害のあるものとして、説かなかつたのである。

宗教は國を興し、國を亡ぼすものである。孔子の趣意は、當時流行の天命思想や宿命的迷信から、人間を開放して人間性に突入するにあつた。人間をもつて一切の道德の根源となしたのである。

教學は急なるもの、絶對的なるもの、實現過程である。そして、その實現の方法と説明とは、時代と共にかはるべきである。孔子當時の人々は、古代の迷信的信仰と功利の宗教に歸依してゐた。天に藉口して、運命に逃避しようとする傾向にあつた。新しく人間を打ち立てるためには、先づ、迷信、功利の宗教を打破するにあつた。

孔子は、この時代の要請を觀破したのであつた。その故に「性は相近く、習は相遠し」と強調したのである。「未だ人に事ふること能はず。焉んぞ鬼に事へん。未だ生を知らず。焉んぞ死を知らん」と、現實的人間を對象としたのである。孔子が敢へて宗教を語らなかつたところに、宗教家としての本質があり、そしてまた、人類の教師として尊重すべき偉大性があると、私は思ふのである。

孔子が重病にかゝつたとき、子路は禱らんことを請ふた。師は、「丘の禱るや久し」と、これを却けたのであつた。けだし、子路の心は、俗宗教の家内安全息災延命的の偶像的なにはか信仰であつたので、今更なにをいふのだ、俺は天を信じ、常に天に禱つて生きてゐるのだと、叱りつけたのである。

孔子の宗教に對する眞意と、當時の一般の信仰状態は、次の論語の章句からも推量せられる。

「王孫賈問ふて曰く、その奥に媚びんよりは、寧ろ竈に媚びよとは、何の謂ぞ

や。子曰く、然らず。罪を天に獲れば禱る所なきなり」と。奥とは、所謂奥の院の正體の神のことである。竈とは、その前にある御使の神のことである。王孫賈は、天子を蔑にした不忠便佞の臣であつた。自分の惡事を糊塗するために、御供物をして竈に媚びれば、萬事は清拭されるものとする卑俗な信仰であつた。危策や危計ばかりを弄して、悔ゆることもなく、ただ形式的な神祭りで、安心立命が出来ると思ふと、大間違ひである。絶對の天、正體の神は欺くことはできないぞと、孔子は説破したのであつた。

孔子は、天地の生命現象の眞髓を把握してゐた。天地の生命の本體を感得することが、即ち宗教である。この本體に人格神性を與へると否とは、人の隨意である。然し、人間は人格の持主である。その人格を自覺せぬやうな人もあるかも知れぬが、苟も人間である以上は、人格をはなれては、存在し得ない筈である。人格の主體が、物を觀察する場合は、人格を通過せざるを得ない。人間の安心感は、

天地人一體であると思はるゝときに、得らるゝものである。この一體感こそ宗教であり、そこから力強い信仰が湧いてくるのである。

かやうな意味に於ての宗教は、孔子にあつたものと、確信するのである。辯舌に長じた子貢は、師の言を「道に聽いて塗に説く」弊があつたので、彼をたしなめる意圖もあつて、「予言ふことなかとす」と、孔子は云つた。子貢は周章して、「子、如し言ひたまはずんば、則ち小子何をか述べん」と、先生がいままで通りに、教へて下さらぬならば、われ／＼の話の種がなくなつて仕舞ふ。かくては、辯舌も出来ない、哀願したのであつた。孔子は「天何をか言はんや。四時行はれ百物生ず。天何をか言はんや」と答へたのである。孔子は天を相手とした。天をみよ。黙々無言の運行である。然し、春夏秋冬の四季は行はれて、百物は生長してゐるではないか。われ／＼は先づこの理趣を體得すべきである。人を教化するのは、言語ではない。その心事行動である。心事行動が立派であるなら

ば、周囲は自ら生々化育せらるゝものであると。こゝに孔子の宗教と自負とを窺ふことができる。

「天徳を予に生せり。桓魋それ予を如何せん」とは、孔子が、桓魋といふ悪奴に殺されんとした時に、逃げよとの弟子の注告に應へて、發した語であつた。天が大徳を、自分に授けてゐる以上は、天が予を守つてゐる。桓魋は、どうすることもできまいとする天地人一體の安心感であつた。孔子は、己れの方で生きる、己れの方で生れ、己れの徳をもつてゐるとは云つてゐない。全く之を天に歸して天の賜たることを信じてゐた。これが孔子の宗教である。

このやうな信仰と、自負とは、匡で陽虎と間違へられた時にも、のべてゐる。

「子匡に畏る。曰く、文王既に没して、文玆に在らずや、天の將に斯の文を喪きんとするや、後死者斯の文に與るを得ざるなり。天の未だ斯の文を喪さざるや、匡人其れ予を如何せん」と。

孔子は謙讓な人である。正歪曲直に對しては明確であり、立論直截の人である。かりそめに天について語るの人ではない。孔子が、かく云ひかく行動したのは、天に對する信仰と、それによる自己の行動への自負の結果である。

孔子の宗教思想を、簡單ではあるが、以上のやうに解するのである。教育家には、宗教的生命の發露があつて欲しいとの希望をのべて、本稿を終りたいのである。

第三章 先生としての乃木大將

一、學習院々長の拜命

大きな仕事よりも、寧ろ人格によつて、その時世に非常な貢献をする人が、三十年に一度か、六十年に一度か位、出現することがある。さうした人物は、死後二三十年の間は、ただ功績を以て知られてゐるのみであらうが、歲月の經つにしたがつて、功績そのものが、その人格に結びついて、益々光りを放つ時が来る。たとへば軍人であるとするれば、その統率した將士の遺骨が、墳墓のうちに朽ちてしまひ、その蹂躪した都城が、塵土と化してしまつた後までも、尙ほ其の人格と、人格より發する教訓とが、永遠に生ける力となつて行くからである。乃木大將は實に斯くの如き人であつたとは、スタンレー・ウオシユバンの著、「乃木」の冒頭にかかげてゐる讚辭である。實に、適評といふべきであらう。

乃木大將が逝いて三十年になる今日、關係書の續出してゐるにもかゝらず、先生としての乃木大將を、描かうとする私の意圖も、大將の人格と、人格より發する教訓とを中心として、短期間ではあつたが、學習院々長として、子弟の訓育にあつた大將の師としての態度を、参考にして學ばんとするにある。

乃木大將は、明治三十九年八月二十五日、宮内省御用掛を仰付けられ、學習院に出仕することになつた。ついで、四十年一月三十一日、軍事參議官のまゝ、學習院々長を命ぜられた。

武人である乃木大將が、學習院々長となり、教育家として、特に華族の子弟を訓育することになつたのは、明治天皇の特別なる思召しによるものと拜される。當時、山縣有朋を中心とする陸軍首脳部は、大將を以て、參謀總長に補すべく内奏したと仄聞する。

このとき、明治天皇から、

「乃木については、朕の所存もある。參謀總長には、誰か、乃木より外の者を補任することにせよ」

といふ御意味の長れ多い御諒があつたと、承つてゐる。

日露戦争の當時、大將は旅順攻撃を擔當した。大將は、最初の程、難戦して所期の成果を必ずしもあげ得なかつた。このことに、軍中央部は甚だ不満であつた。山縣有朋は、御前會議の際、大將の旅順攻撃に関する戦術策戦の経過を、報告批評して、暗に、乃木大將の更迭方を、申出でたところ、陛下には、即座に、凜然たる御態度にて、

「汝達は、左様にして、乃木を憤死させる積りであるか」

といふ御意味の御言葉に接した。

山縣は、恐懼措くところを知らず、冷汗して、御前を退下したと傳へられてゐる。この時の山縣の不面目は、いふまでもないが、此度は、乃木大將を參謀總長

の榮職に内奏したのである。然るに、陛下には、「乃木には別に所存がある」と御採用にならなかつた。山縣は、陛下の御氣色を損じ上げはしなかつたかと、憂慮し、かつまた、陛下の、大將に對する御信任の厚いことを、更めて感じたのであつた。

その後暫くして、乃木大將は、學習院々長になれとの、御諒を賜はつた。このことは、甚だ唐突のやうであるが、明治天皇におかれては、既に長い間の御念願であつたと、拜する。

また、大將に於ても、決して突然ではなかつたのである。大將が、明治四十年一月、或る會合で、院長としてなしたる挨拶中に、次の言葉がある。

「自分が學習院に參ることになつたのは、種々の事情のあることである。今回の戦争が始まらぬ前に、或る先輩から、學習院長になるやうにとの話があつたが、當時は、戲言同様に、きゝ流してゐた。然るに、戦役が終つてから、また其の話

が始まり、今度は眞面目な話になつて來た。……教育の事に關しては、トンと考へて見たこともなければ、経験したこともない。然るに、天皇陛下に於かせられても、學習院の事については、御軫念あらせられ、實は、陛下の思召しとあつて見れば、事の成否等を顧慮して居るべきでない……と。

かくて、大將は、二三日の御猶豫を願ひ、熟慮した上で、御詔を拜受したのである。その時にも、陛下より

「汝は、兩人の愛兒を失ふて、さぞ淋しいであらう。これからは、學習院の生徒を、自分の子供と心得て、その訓育に任ずることにせよ」との御言葉と、いさがある人を教への親として

おほしたてなん大和なでしこ

の御製を賜はつた。

陛下の、學習院についての御軫念と、大將のいふ種々の事情とは、どんなところ

ろにあつたのであらうか。

明治天皇が、何故に、特に武人である大將を、教育家として、學習院長に御所望あらせられたか、私共として、推察するだに、畏れ多い極みであるが、陛下の御意圖には、二つの大きなものがあつたと拜察する。

當時、明治天皇には、御三方の、皇孫殿下があらせられた。そして、今上天皇であらせらるゝ、第一皇子殿下には、明治四十一年四月を以て、學習院へ御降學遊ばされる御豫定になつてゐた。ついで、第二皇子殿下、第三皇子殿下におかれども、御降學になることになつてゐた。

乃木大將こそ、この御三方を托すべき、最適任の教育家であるとの、御信任が第一のものである。

他の一つは、學習院の改革にあつた。即ち日本は勝利の結果、一躍して世界の一等國になつた。國民は戦捷に酔つた。殊に、上流一般の風儀は、可成り弛緩し

てゐる様子にあつた。そして學習院の生徒は、概ねこれら上流華族の子弟であるので、その弊風に感染して、學生の氣風も、軟弱になる傾向にあつた。華族は國家の藩屏とされてゐる。従つて、その子弟である學習院の生徒等は、當然新日本の指導分子とならねばならぬ使命を有してゐる。かつ、學習院創立の趣旨には軍人養成のことも、含まれてゐた。然るに、世の弊風は、院内にも入り込んで、風教上、教育上、甚だ面目ない状態にあつたので、その改革はかねての課題となつてゐた。

この課題の解決者として、謹直、勤勉、誠實、そしてまた、温情の乃木大將が擧目されたのである。

大將は、明治十年の戦争以來、つねに死所を求めてゐたのであるが、院長就任の御詔を拜し、更めて、陛下の御信任に、恐懼感激したのである。赤心を吐露し、凡てを傾けつくして、院長就任の聖旨に、應へ奉らんと決心したのであつた。

そして、大將は、「人を教ふるに行を以てし、言を以てせず、事を以てし、理を以てせず」の態度をもつて、學習院に臨んだのである。これがまた、大將の教育精神であつた。この精神と態度とは、何に據つて得たのであらうか。大將は、この精神と態度とを以て、如何にして課せられた二つの目的を、遂行したのであらうか。

二、院長就任と内外の不満

大將の院長就任は、心ある人々からは、非常な感激と期待とを以て、喜び迎へられた。大將によつて、學習院の柔弱軟惰の氣風が清掃され、質實剛健の氣象をもつ青少年が、養成されるものとなしたからである。

しかし他面に於ては、大將に嫌らぬものもあつた。大將を嫌忌する空氣は、子

弟の中にも、父兄の中にも見受けられた。西洋文明の一面に心酔し、新しい思想にかぶれた、所謂文化人を以て任ずる風のあつた當時の上流階級の人々のうちには、一介の武辨大將の教育者の性格に對して、不満と不安とがあつた。

性格的に變人的なところがあるのではないかとまで、世間から見られてゐた大將には、大切な子等を、兵隊同様に取扱はれる可能性が多分にある。かくては、子等としてまた親として、耐へ得ないところである。下層階級の子弟教育には軍人的教育も効果はあるが、華族には、華族としての教育がなければならぬ。即ち、舉措、應待、禮法等、自ら異なるものがあるとなしたのである。

この様な不平不満の聲は、隨所に起つたのであつた。この父兄の聲を反映したのであらうか、院内の學生のうちにも、大將の院長就任に反對を唱へるものが出てきた。

大將の院長就任のことを、學生達が知つたのは、明治四十年一月八日の始業式

當日の事であつた。

このことを聞くと、院生の全般は大いに歡んで、興奮の中に大將の着任を千望したのであつた。

ところが、五年のある院生が、突如として左右を制しながら、反對を唱へ出した。

「諸君、靜かにしろ。それは、有難いことではない。考へて見給へ。教育は人を創造することであつて、堡壘を陥落させることではない。血みどろな修羅の巷の名將は、育英者としては怪しいものだ。兵隊訓練の形式で、自分等の教育を、オイチニ／＼とやられては堪えられないではないか」と。

これに對して、或る院生は、

「軍人であらうが、政治家であらうが、最高の人格者ならよいではないか」と應酬すれば、

「いや違ふ。人格者であることは、必要である。さりとて、人格ばかりでは、到底むづかしい。教育には、特殊の眼識と眼索とを要する。力を鍛へる人、必ずしも人を鍛へるとはいへまいではないか」と。賛否の論は、沸騰したのであつた。この不満學生は、始業式を終へ、歸宅した後、直ちに机に座し、筆を執つて、所信を認めたのである。

「教育は人工的では駄目である。形式的ではだめである。徒らに活字の記憶を鋭敏にするためではない。卒業證書を與へるのが、終局の目的ではない。頭腦のみ大きくして、手足の小さい悲しむべき、不具者を作るがためではない。教育は決して、窮屈なものではない。乾燥なものではない。偽裝すべきではない。

教育は自由なもの、單純なもの、赤裸々なものである。野に開く花、海より離るゝ太陽、森より出づる月の如く、爽かにして清快なる、萬有の自然創作であらねばならない。大宇宙の血と涙とに洗はれた、一大鴻業であらねばならない。

要するに、教育も亦、偉大にして永遠なる、一大生命藝術である。星や太陽のつねに、一定の軌道を進むが如く人工的ならざる、天然の大法則に順ひ、委託せられた教へ見達に接すべきである。教育は靈的藝術である。ベートーヴェン、メンデルスゾンの音樂、マイケロアンゼロ、トルワルトゼンの彫刻、レムブラント、ミレーの彩筆の如きものである。天の光が野の花を開かす如く、幸福なる野鳩が彼等の雛を集むる如く、我等に宿りし、醇精な聖愛が、極めて自然に、傲慢なる人の魂を碎くことである。人らしき人を創作し、その上に、生活能力を養成する。そのことが生命教育である。従つて、教育は個人的であつて、團體的であつてはならない。純愛的であつて、懲罰的であつてはならない。生命的であつて、形式的であつてはならない。

本校指導者として、噂のある某將軍の如き、崑山血河の戦に於ては、或は、名將の大器かも知れないが、平和たるべき育英の聖業に於ては、頑迷な失敗者であ

るかも知れない。將軍の過去の教養は、殆んど團體的であり、刑罰的であり、形式そのものであつたに相違ない。不肖は、某將軍を主宰者として、奉戴することに絶対反対を表明する者の一人である」と、血氣にはやる青年は、かきなぶつたのである。

下士はその言を聞き、中士はその行を見、上士はその心を知る、といふ老子の語があるが、彼の見解は、一つの教育論といふべきではあらうが、彼は、大將を形式の末に於て、理解したのである。大將の青少年時代の、心血をそゝいた父や師の薫陶や、大將の學習や、はたまた、幾多の生命を犠牲にした経験によつて、生命の貴さを體得せる大將の心中を、洞察することは出来なかつたのであらう。

彼は、この所論を、匿名で校友會雜誌に投書した。これを檢閲した某教授は、愕然として、直ちに委員に撤回を命じた。然るに、彼は、文藝委員たるの地位を利用して、極秘の中にこれを印刷に附して出版した。

この一事件は、展開して大問題となつた。院内は、騷擾と苦慮の坩堝となつた。學校の態度は、容易に決しなかつた。遂に、大將就任後に、持ち越されることになつた。

同年一月三十一日、學習院の全生徒は、講堂に集められ、大將の就任式が行はれた。

大將は、儼然として壇上に立ち、おもむろに、口を開いた。

「私は、一介の武辨であつて、教育者ではない。苟も、華族子弟の教育を司れる本校の指導者には、世間自ら、その人ありと考へられる。従つて、此度の仕事を拜受するにも、かなり躊躇逡巡したのであつた。がしかし、御説とあつては、拜受の外に道はあり得ないのである」と冒頭して、諄々と續けた。「兵士を訓練することゝ、諸子を教育することは、勿論同一目的ではない。……がしかし、至誠を以て人に接する一事に至つては、決して變りがないと信するのである。……」

……校友會雜誌の高論も再讀した。御趣旨も同感至極と思ふが、ただ、無名子であることが、如何にも残念至極であつた。この室内には、必ずその筆者も列席して居らるゝことと思ふ。乃木は、日露戦争後は、姥と唯二人きりで、淡々たる冬の夜は、まことに長くして静かだ。是非その筆者と親しく膝を交へて、夜嘶しの機會を得たい。さすれば、お互に、啓發さるゝことも、多々あるであらうと信ぜられる」と、犯すことのできない氣品と、慈愛とを湛へた態度で、就任の挨拶をなしたのであつた。

大將の話は、いつも簡單直截であつた。言理を目的としないのが、その教育の方針であつた。しかしそれは、全生命の吐露であつた。その一言一句には、無限の含蓄があつた。その態度は明鏡止水の如くであつた。血を以て教へ、涙を以て諭す大將の態度に接して、全生徒は感激した。

その時、反對者である某は、込みあげてくる嗚咽を押へながら、全身蒼白の面

持であつた。そして、滂沱として、落つる涙に、頬を濡らしてゐたといふことである。爾來、彼は、大將崇拜者の一人となつて、身心の修養に精進したのであつた。

彼の越權行爲も、大將によつて許されたのである。

父兄の不平不満も、決して尠少でなかつた。大將は、就任後まもなく、初等科を巡視した。その後直ちに、受持の先生に向つて、「何學年の教室には、頭髮をのばした生徒がある。直ちに、散髪させるやう」と命じた。父兄は、このことを以て、大將の武斷主義の片鱗のあらはれであるとして、慊らぬ感をいだいた。

大將は、當時の學習院の惡習柔弱な氣風を一掃するためには、先づ生徒を家庭と分離するにあると感じたのであらうか、中等科以上のものは、一律に、寄宿舎に入舎せしめることにした。寮に於て、規律のある起居動作を習得せしめて、節制のある生徒を、養成しようと企圖したのである。

不平子は、このことを捉へてまた、軍隊主義教育の反映である。學習院の傳統を破るものであると、反對的空氣をただよはせた。父兄等の、寄宿反對の論據は、次の點にあつた。

寄宿舎に入れられて、繊弱い子供を、兵隊同様に取扱はれることは、親の身として、堪えられない。子供が、土曜日に歸宅すると、まるで餓鬼のやうに、食物を強請する。學校では、充分な食量と、榮養のある賄をしないで、可成り粗惡なものを、與へてゐるに相違ないと思はれる。舎では、毛布四枚しか與へてゐないさうであるが、そんなことをされては、子供が風邪を引く恐れがある。寮生活は無味乾燥であるのみではなく、寮に入れられたために、家庭教師をつけて、充分の勉強をさせることも出来なくなつた。また、成績不良の生徒の爲めに、邪魔せられて、成績が低下する懸念があるなどと、數々の理由を述べて、罵々たる非難を放つたのである。

大將は、自ら舎に於て、起居を共にし、同食同寢してゐたので、これらの批判質問に對しては、自信を以て、懇切叮嚀に、その趣旨を説明することが出来たのである。大將は、自分に不可能なことまで、人に命じるのではない。寄宿舎に於ては、質素にせよ、勤勉にせよ、禮節を重んじて、忠孝をつくせといふことを、實踐を以て示すのである。かつまた、幼時柔弱であつた大將の今日あるのは、全く硬教育の賜である。この乃木が、責任を以てお預りすると、その方針と經驗を謙虛な心で説明するので、父兄も安堵して、賛同敬意を表するに至つたのである。謙讓の人、正否のはつきりしてゐた大將は、努めて教授間の意見を求めてゐたので、教員間には、積極的反對をなすものは、なかつたやうである。これも、就任當時のことであるが、職員會議で、あることについて議論が、沸騰した。虚色のない、淡々たる大將は、早速自分の意見を發表しようとした。大將は、自分を普通の人としか考へてゐないが、職員等は、とかく遠慮勝らであつたので、一教

授は、勇敢に注意を促した。

「院長の御意見は、なるべく後にして下さい。さもなければ、他の者が、各自の意見を差控へるやうになります」と。

大將は、これを聞くや、「やあー」といつて、頭に手をやり、

「これは、私が悪かった。どうぞ皆さん、御遠慮なくやつて下さい」と優しくあやまつたのである。

大將は、自己を信ずることが、厚かつたので、頑固のやうにみえたが、その非を悟るや、改むるに憚らなかつた。

目白に新築中の、學習院の工事を巡視したときのことである。大將は、所々に貼られた喫煙嚴禁の札に、氣附かなかつたためか、愛好の煙草に火をつけた。これを見た案内役の久留技師は、

「閣下、こゝは私の縄張りです。喫煙は御免蒙ります」と大喝した。

大將は、吃驚して、「やあー、これは濟まん、濟まん、許して呉れ給へ」と、煙草をもみ消し、子供のやうに、心から詫び入る姿に、技師は却つて、恐縮したといふことである。それからすつと後のことである。明治四十三年八月、大將は、重い中耳炎を患つた。六ヶ月の療養で、やつと回復したのであるが、歸校後直ちに、折柄行はれてゐた劍道の寒稽古に出ようとした。これをみた、委員の一人は心配して、見合はせらるゝやうに注意を促したが、容易にきゝ入れられなかつた。これを知つた校醫は、

「閣下、寒稽古への御出席は、お止め下さい。先生方が皆、これを心配してをります。それでも、強いて閣下が御出席なさいますと、皆は、閣下は人言を容れぬ頑迷の方だと思ひ、學習院に關して、よい意見を持つてゐる人でも、進言を中止するやうな、惡結果をもたらさないとも限りません」と校醫としての立場からではなく、人間としての立場から注意した。

この時に至つて、大將は、いつものやうに「やあ」と、頭をかへながら、「さうか。これは一本參つた。いづれ、ゆつくり考へよう。有難う、有難う」と、忠言に感謝して、道具をつけてゐた寒稽古も、思ひ止まつたのである。

以上述べたやうに、就任當時の大將の周邊は、可成り險惡であつた。然し、大將の秋霜烈日の志操と、清澄枯淡な性格と、心血のあふるゝ誠實とは、恰も、葵の天日に向ふやうに、周圍の人々を化したのであつた。

三、大將は文人たらんとす

軍隊の頑固親父は、凡そ育英には、縁の遠いものであるとして、その就任當時に於て、大將は騒々しい反對にあつた。

なるほど、大將は軍隊に育つた。しかし、その軍隊は、教育に終始してゐる。

日本軍隊の偉大は、御稜威のもとに、徹底充實したる教育の賜である。繰り返しくりかへして、訓練に鍛錬を重ねて得た集積である。そして軍隊教育の特質は、反對學生の指摘したやうに團體教育にもあるであらうが、その目標が、いはゞ單一明確なところにある。世論に惑はされたり、政治に禍ひされぬ、一貫した教育にある。そして又、教育の對象が、揃つて健強無比なる點にあると思はれる。然るに、一般の學校に於ては、學生は個々の志學目的を以て學ぶので、甚だ雜然としたものである。肉體的にも不揃ひを極めてゐる。

反對者は、このことの混同を心配したのであるが、教育の一面の任務は、そして根本的なものであるが、精神の修練にある。精神の修練には、軍隊教育も、民間教育も差異あるべき筈はない。

然し、このことはともかくとして、大將は、反對者等を着々と化したのであつた。これは、人格の然らしむるところであつたらうが、大將には、誠實以外に、

教育者として何の取柄もなかつたのであらうか、いひかへると、大將は、教育者となり得る環境に、育たなかつたのであらうか。或は教育者の性格を、賦有してゐなかつたのであらうか。これらのことについて、若干探求してみたい。

順序として、大將の生立ちを、簡単に述べるであらう。その前に、大將の祖先は、代々醫を業としてゐたこと、大將青少年時代の念願は、軍人となることではなく、文人として、維新前後の文運開拓に、身を委ねんとすることにあつたことを一言觸れておく。

乃木家は、宇治川の先陣争ひで、有名な佐々木四郎高綱の出である。彼の次子である次郎左衛門尉光綱が、出雲の國、野木に住して、野木を氏とした。野木氏は諸方に散在したが、長府乃木家の始祖は、天和二年江戸に於て、醫を業としてゐた。その後継者である瑞榮傳庵は、武術弓術に嗜みのある故を以て、長府の第三世綱元公に、侍醫として聘せられた。

乃木大將の父、十郎希次の曾祖父は、宗藩主重就公に仕へて、別に乃木氏を興し、定府の侍醫となつた。そして、長府の乃木家は、一時斷絶したが、後再興した。大將の父、十郎希次は、その養子として乃木家を繼いだのである。

希次は、五歳のとき養子となり、侍醫として、藩主に仕へねばならぬ運命におかれた。彼の祖先は、名のある武士であつたが、曾祖父の隨友が、醫を業としたので、希次も醫を繼がねばならなかつたのである。

希次は、氣骨稜々の生れつきであつた。その生成するにつれて、家業の醫を嫌つた。武藝を以て、藩に仕へようとする熱望に燃えてきた。遂に、彼の宿望は實を結んで、士班に列することが出来たのである。

後に述べるであらうが、希次は故あつて、江戸より長府に下る身となつた。そのころ「長府には、洵に賢臣がある」と、周圍の藩から激稱せられるものがあつたが、その賢臣こそ、大將の父、十郎希次のことであつたのである。

希次の生れたのは、文化二年のことである。文化二年といへば、その翌年にはロシアのレザレフが、長崎に來航して、交易を強いてゐる。これが契機となつて、國內は騷擾と混亂の中に、追ひ込まれた頃である。蘭學が發達して、新しい世の鐘が鳴り響かうとする頃であつた。それに反して、指導者であるべき武士階級の魂は、腐れ切つてゐる仕末であつた。武士階級を、覺醒せしめねばならぬときであつた。

天性、質實尙武の氣象に富んだ希次は、この空氣に堪え得なかつた。醫を業とする運命ではあつたが、武士への憤激に驅り立てられて、彼は益々、士班へ列する志望を強固にした。次第に醫の修業は忽がせになつて、馬術槍術劍道等の修練と、武家の故實禮法の習得に、研鑽するやうになつた。彼の同族は、これを心配したが、彼の武士への眞劍と熱情とは、遂に同族をうごかした。そして希次の希望を藩主に願出たのである。

希次は、列士班への考試として、藩主元義公の御前に於て、深川三十三間堂で試射を命ぜられた。日頃の修練の效あつて、彼は、天晴れな成績を示したので、特に聽許されて、士班に列することになり、馬廻り役を命ぜられた。彼の十二歳の時である。

乃木大將は、このやうな経緯をもつ希次の三男として、嘉永二年十一月十一日江戸で生れた。大將は、三男であつたが、兄等は死亡してゐたので、父にとつては、洵に天與の子といふべきであつた。

大將は、生れつき強健でなかつた。このために、母の壽子は養育について、一方ならぬ苦勞をした。然し、父の大將に臨む態度は、常に士としての養育にあつたので、假借するところがなかつた。

希次は、既に述べたやうに、柔弱なる武士階級に慊らず、自ら氣骨のある武士たらんとする志から、士班に列したのである。然し、自らの領域を越えて、自己

を誇示するやうな人ではなかつたが、苟も禮節に嫻はぬもの、非違を通さうとするものに對しては、上役はいふまでもなく、藩命と雖も、異見のあるときは、直諫して憚らなかつた。これが即ち、藩主への忠義と心得たのである。このために側近の嫌ふところとなり、藩主の忌諱にふれたといふ理由のもとに、遂に江戸拂ひとなつて、長府に左遷された。乃木大將の十歳の時のことである。

母と弟妹は、駕籠を用意されたが、大將と父とは、徒歩で大阪に向ひ、大阪よりは船で長府に行くといふ、親子五人の苦難の道中であつた。而もそれは、謹慎の逃避行であつたので、藩から何の便宜も與へられなかつた。父の苦難は、押へがたいものであつたが、それにも増して、纖弱な十歳の大將にとつては、大阪までの徒歩は、想像するだに堪え得ないものであつた。母はこのことを心配して父に懇願した。大將も哀願の態度であつたが、父は大將のために駕籠を用意することは許さなかつた。父は、つねにか弱い大將に對して、つねに鍛錬と忍耐とを要

求してゐた。

一行が、鈴ヶ森について、一休みしてゐるときであつた。二人の駕籠かきが、大將の泣面をみてとつて、五月蠅く駕籠を要請してきた。

悪性の駕籠かきは、東海道難物の一つであつた。希次が仲々求めに應じないの、強迫的態度にでた。旅装からして尋常の人と思ひ、かゝりあひをつけて、不意に手向つてくる氣配を示した。希次は、早くも身を開いて、其奴の肩先を斬りつけた。駕籠かきは、蒼皇として、肩を押へながら退散した。小手の働きで、刀の背を返して打つたことは、いふまでもない。

母は、大將のいたいたしい姿に堪えかねて、そんな手荒なことをなさらずにと、重ねて駕籠を願つた。父は、淋しさうな大將の顔を見て、「お前、恐ろしかったか」と、尋ねるのであつた。「いゝえ」の答に、父は、「それは偉いな」とほめた。

ついで大將が「駕籠屋は、逃げてゆきました」といふと、父は「それは弱いからだ。弱いものは、逃げてゆく。強ければ向つてくる」更に大將が「斬られるでせう」といへば、「斬られても向つてくる。それは強い人のことぢや。人に無理を云ふものは、みな悪人である」などと、大將は、道中かずくの教訓をうけつ、徒歩の旅をつゞけたとは痴遊の語るところである。

一行は、無事長府についた。間もなく罪は赦されて、元周の御曹子の輔導役を仰せつけられた。苦しかつた家計の餘裕も出来、大將の求學心も燃えてきた。

父の大將に求むるところは、武人としての教育であつた。大將は、父の命により、十一歳の時より、漢籍、詩文を香崖について學んだ。十三歳の時より、馬術、弓術砲術或は槍術などを修練せしめられた。しかし、大將自身は武技のみに専念するを好まなかつた。

大將の志望は、文事にあつた。そして、十四歳の時、福田扇馬について、兵書

史學等を學ぶやうになつて、益々、學問禮法により、身を立てようとの決意を固めるにいたつた。

文人たらしとする大將の志は、父母に容れられなかつた。父にしてみれば、無理からぬことである。父は弱冠十二歳のとき、家業の醫を捨て、深川三十三間堂に於ける通し矢の考試によつて、特に士班の身となつたのである。

大將は、一應は觀念したものゝ、兵書を讀み、歴史を繙くにつれて湧き出る興味は鬱勃として、制する術もなかつた。

その當時、本藩の人材養成所として、萩に明倫館があつた。明倫館への入學は、青年の最高の榮譽とされてゐた。大將の憧憬もこゝにあつた。明倫館には、玉木翁や吉田松陰が關係してゐた。

大將は、明倫館へ遊學したい希望を、父に訴へた。父の大喝にあつて、これまた挫折したが、初志を貫かすんば止まぬ大將は、私かに、時機の到來を待つてゐ

た。

遂に意を決して、萩の叔父である玉木文之進のもとに出奔した。大將の十六歳のときである。無一文の大將は、十八里の道を、一日でかけつけた。東海道の徒歩の経験が、役立つたのである。

大將は、玉木文之進から、詰問せらるゝまゝに、無断で家出したこと、身體虛弱の爲め、武事を止めて、學問禮法によつて、立身したい旨のことを話した。そして、先生の訓育に預り度いと懇願した。

玉木文之進は、松陰を鍛へるに際して、松下塾の前にある三間近い斷崖から幾度か突出したといふ剛のものである。大將から逐一事情を聞くや、

「乃木家は、武門の譽の家である。その嫡子である汝が、武事を厭ふとは、不届の至りである。身は鍛へれば強くなる。孝は百行の基だ。父母に背いて、家出するとは、何事ぢや。武事が厭なら百姓になれ。身體も強くなる。どうぢや」と

詰責の中に、大將の決意をもとめた。

大將の出奔は、學問の研鑽にあつた。今更百姓になれと云はれても、即座には答へられない。ただ、うつ向いて黙つてゐた。

文之進は、「莫迦者め、おまへのやうなものは、無用である。歸れ、我儘者が」と、大喝した。

大將は、詮方なく、悄然として文之進の家を辭去した。そして、困惑苦惱の中にも、足は自然と我が家の方向にむいてゐた。しかし、大將は、文之進の妻である辰子に呼び止められた。その慈愛の説得によつて、文之進の家に留まることになつた。辰子は、陰に陽に、大將の面倒を見るのみならず、學問の指導までしたのであつた。

翌十七年、大將の宿望は叶へられて、明倫館へ入學することができた。大將の志は、あくまで文事にある。明倫館には、文學寮と兵學寮とがあつたが、大將は

いささかも躊躇することなく、文學寮を選定した。玉木文之進も、一度は注意したが、ことごとくに至つては、黙許するのほかなかつた。大將の文人たらしとする志は、それほどに強かつたのである。

こと志と違ふのは、世の常である。文事を以て立身しようとした大將も、軍人となるの運命におかれた。

嘉永六年には、アメリカの黒船が浦賀へ乗込んだ。強迫的に、開國條約を求めたことが、契機となつて、開國攘夷の論が沸き上つた。そして、朝廷と幕府とは、愈々阻隔するに至つた。やがて、幕府の長州征伐となり、維新大業へと展開した。

慶應元年正月には、既に高杉が舉兵した。十一月、幕府は長州の使者を廣島に引見して、審問會議を開いたが、事は再び破れた。

かくて、長防の天地は、暗澹たる雰圍氣にまきこまれたのである。青年達は、

武士に拘らぬ日本はじめての義勇隊を組織した。奇兵隊、報國隊などと、その好む隊伍のもとに、決戦態勢を整へた。この國難の中にあつて、明倫館の生徒等も、もはや安閑として讀書してゐることは許さるべくもなかつた。

乃木大將、報國隊に屬した。一砲門の長に拔擢されて、小倉に初陣した。

このごたくの間に、薩長の聯合は成立した。幕軍は、長州征伐に敗戦して、事件は一應の結末をつげた。

明治二年正月、大將は報國隊復歸を命ぜられ、かつ漢學の助教を仰せつかつたが、間もなく辭した。

そのころ先輩の御堀耕助は、洋行を命ぜられてゐた。大將は、私かに隨行方を願つたが、公明正大なる御堀耕助は、これを拒絶した。加之、御堀は大將に質問した。

「時に、乃木卿は、文學を以て立つの決意が十分についてゐるのか。それとも

武人として立つ心積りか」と。

大將は、返答に困惑した。宗藩の危急に際して、一時戦争に従事したものゝ、文學を以て身を立てんとする志は、捨ててゐなかつたのであるが返事に窮した。

御堀は、言葉をつゞけた。

「わしは、卒直に、卿に忠告する。文學でたつこともよいが、時勢は、まだ武力を必要とする。單に國內のことのみから推して、左様に云ふのではない。新日本の將來を考へ、東洋の形勢から察しても、かく斷言し得る。卿も國家有用の器であるから、武人として立つやうにせよ。いつか、僕は忠告しようと思つたが、今日まで機會がなかつた」と。

諄々として諭された。武人になることは、父の希望であり、玉木文之進からも再三忠告された。しかし、大將は、二十一歳の今日に至るまで、決心はつきかねてゐたが、御堀のやうに、新日本の前途を、見透してとかれてみると、聊か動搖

を感じたのである。

御堀は、これを察した。

「人は目的が單一でなければ、決して達成し得るものではない。またその目的の大小が、之を達成する上に、非常に影響があるものぢや。單一に確實に立つた以上は、其の達成の爲めに、勇往邁進し、斷じて右顧左眄してはならぬ。乃木。卿も決心して、新政府の陸軍に出るのぢや」と、強く主張した。

かくて大將は、はじめて文學を以て立身することを斷念して、軍人たるべく決意した。御堀の勞により、伏見の御親兵營に入營して、軍人として出發することになつた。

大將が武人となるまでには、以上のやうな経緯がある。大將の大將たるところは、父母の家庭に於ける硬教育による克己と鍛鍊の結果であつた。玉木文之進の鉗鎚と薰陶との賜であつた。大將は、このやうな環境に育つたのである。

若し、大將が初期の希望のやうに、文學を以て立身してゐたならば、或は最初から教育者となつてゐたのではあるまいかと思はれるのである。このことからすれば、大將が後年教育者となつたことも、決して偶然ではないであらう。

四、大將の教育精神

大將は、自ら教育は無経験で、不適任であるとなした。しかし、陛下の思召しである以上は、事の成否等は、顧慮してゐることは出来ない。赤誠これに當るべく決意したのであつた。

大將は、院長就任以來、寢食を忘れて精勵した。朝は、必ず執務時間より三十分前（七時三十分）に登院し、午後は、三時の終了を待つて、退出するのであつた。用事のある時は、五時六時に至るも、決して厭はなかつた。大將は院務を執

る外、勉めて教場を巡視した。殊に、當初の一年間は、職員及び學生について、深い注意を拂つた。また、陸海軍の學校及び文部省管下の諸學校等を視察して參考とした。

寄宿舎の竣成されるや、大將は自ら寮の總寮部に寓居して、學生と起居を共にした。大將の寮生養成の眼目は、堅實なる精神を涵養するにあつた。教學聖訓の實踐躬行にあつた。そしてまた依頼心を去り、獨立獨行の氣風を樹立するにあつた。大將は、その成績の如何は、畏くも皇室にも關係し奉ることを、學生に諭して、その自戒發憤を促したのであつた。

學習院には、學習院精神を規定した學習院學則なるものがある。弘化四年創立の際に、初代學頭東坊聰長の、起稿勸進したものである。即ち

「聖人の至道を履み、皇國の懿風を崇めよ。聖經を讀まずして、何を以てか身を修めん。國典に通ぜずして、何を以てか正を養はん。明かに之を辯じ、努

めて之を行へ」

といふのである。

ある日のこと、大將はこの順序を次のやうに、轉倒した。

「皇國の懿風を崇め、聖人の至道を履む。國典に通せずして、何を以てか正を養はん。聖教を讀ますして、何を以てか身を修めん。明かに之を辯じ、努めて之を行へ」と。

東坊聰長は、和魂漢才を以て任じてゐた人であるが、その人にしてなほ、儒道を先にし、國典を後にしてゐる。今の時代も同様である。押し寄せてきた歐化萬能の風は、不知不識の裡に、西洋かぶれになつて仕舞ふものである。注意しなければ、憂ふべき結果になるとの、大將の意圖により、修訂されたのである。

大將は、徹底した日本主義であつた。日本の眞の姿を探求把握して、これを尊崇することの極めて厚い人であつた。西洋文明に基く、自由主義個人主義は、あ

くまで排撃した。この精神は、大將の一生を貫いた信念であつた。大將は、山鹿素行や素行を祖述した吉田松陰に私淑した。その端緒は、父十郎希次と叔父玉木文之進とによつて、培はれたものと想像せられる。

然らば、父の希次は如何にして、山鹿素行を懐仰したのであらうか。

元祿の義舉に参加した赤穂義士四十七人は、取り敢へず別れ／＼に、諸家に預けられた。武林唯七外數名は、毛利家に預けられて、日ヶ窪の藩邸に謹慎してゐた。

謹慎の生活は、切腹を仰せつかるまでの數十日間であつたが、その立派な舉措動作は、藩中の子女に至るまでに、感銘を及ぼした。その義烈の精神と一糸亂れぬ態度とは、百年の後までも、毛利家の教訓として残されたほどである。

毛利家に仕へた父の希次は、清廉潔白剛直の士であるだけに、唯七等の行動の據つて來るところを、専念に究めたづねた。義士精神は、山鹿素行によつて養成

せられたところであるので、父自身も素行 學んだが、これがまた、大將をして素行に向けしめる因となつたのである。父は、大將を訓育するに當つて、よく赤穂義士を例示した。

大將十五歳の時である。父は松陰の武教講録を、自ら手寫して大將に渡してゐる。その武教講録は、素行の武教小録を、松陰が講義したものである。また十七歳の時は、玉木文之進から、松陰自筆の士規七則を授けられてゐる。

かやうにして、大將は松陰に學び、素行に私淑したのである。素行の中朝事實と、松陰の士規七則とは、大將の全精神であり、その教育精神であると看做し得るであらう。

明治四十二年五月、學習院長として大將は、舊同郷青年集會の需めに應じて講演したことがあるが、その講演の中に、大將の士規七則を尊信せる理由と、如何にして之を遵守すべきかについて述べてゐる。即ち

「前略。士規七則は、既に諸君の知らるゝ所にして、一々之を説明するの要なかるべし。今日に於いては、軍人に賜はりたる 御勅諭が、我々軍人の精神として奉體すべきものにして、他に之に代るものを求めることは出来ぬ。然れ共、此の 御勅諭を下し賜はりたる以前においては、我々當時の青年は先輩より、今日に於ける 御勅諭の如く士規七則について訓戒せられたるものなり。而して、我が防長即ち毛利家勤王の功績は、祖先以來、殊に忠正公の御忠節に依りて發揮せられ、今日皇室の御繁榮を來せるも、一には之れに因るといひ奉るも不可なし。維新建業の際、偉勳を奏せし人々は、吉田先生の薫陶を受けたるもの多く、換言すれば、吉田先生の功、大なりと云ふを得べきものにして、我々その後に入と成りたる輩は、實に先生の七則を尊信すること今日の 御勅諭の如く、精神鍛鍊の準據としたるものである。勅諭は 陛下の下し賜はりたるものにして、臣民として皇室に對する勤王の心を養ふものなり。而も之と比較するも恐れ多きことであ

るが、士規七則は我々毛利家の治下に在りたる者に對しては、之と同様に最も肝要なる教訓であつた。今日に於いても、亦同様なるものと思ふ。由來、我が山口縣人は毛利家數百年の勤王の家柄に依つて、成立せるものにして、明治維新に際して、毛利家の名物たる吉田松陰先生ありて、この勤王の方針を遺憾なく發揮せられたるものなることは、吾人の一日も忘るべからざることである。然り而してその教戒せられたるところのものは、即ち毛利家代々の勤王の趣旨に反かざるのみならず、後日と雖ども尙ほ之を發展するの要あるや勿論なり。今、左に七則を述べ、併せて我々軍人が如何にして之を遵守すべきやを述べん」と。

士規七則を列擧して、その遵守すべき理由について説いてゐる。

毛利家の金科玉條となつた士規七則は、吉田松陰が、萩の野山獄に囚はれの身となつてゐたとき、獄中から、松陰の師玉木文之進の息である彦助の元服を祝して之を送つたものである。松陰は、その草稿を示して、玉木文之進の加筆を乞

ひ、後清書して彦助に與へたのである。乃木大將が、玉木文之進から授けられたる松陰自筆の士規七則は、その際に同封して來た草稿であつた。大將は、明治十年戦争の際、之を紛失した。これによつても、大將は常に之を所持し、如何にこれに準據してゐたかが窺はれるのである。

時は正に、大東亞戦争の遂行下にある。舉國一體、士氣の昂揚を要請せられてゐる時に當つて、吾々は更めて、士規七則を再讀するも、決して徒爾ではないと感ずるので、大將と共に、これを讀みかけることにした。

士規七則

冊子を披繙すれば、嘉言林の如く、躍々として人に迫る。顧ふに人讀まず、即ち讀むとも行はず、苟に讀みて之を行はゞ、則ち千萬世と雖も得て盡すべからず。噫、復何をか言はん。然りと雖も知る所あり。言はざるに能はざるは、人の至情なり。古人はこれを古に言ひ、今、我これを今に言ふ。亦詎ぞ傷らん。士規七則を作る。

一、凡生れて人たれば、宜しく人の禽獸に異なる所以を知るべし。蓋し人には五倫あり。而して君臣父子を最も大なりと爲す。故に人たるの所以は忠孝を本と爲す。

一、凡 皇國に生れては、宜しく吾が宇内に尊き所以を知るべし。蓋し皇朝は萬葉一統にして、邦國の士夫、世祿位を襲ぐ。人君民を養ひて祖業を養ひたまひ、臣民君に忠にして父志を繼ぐ。君臣一體、忠孝一體なるは、唯吾が國を然りとす。

一、士の道は義より大なるはなし。義は勇によりて行はれ、勇は義によりて長ず。

一、士の行は質素にして欺かざるを以て要となし、巧詐にして過を文るを以て恥となす。光明正大、皆是より出づ。

一、人、古今に通ぜず、聖賢を師とせざれば、即ち鄙のみ。書を讀みて尙友するは、君子の事なり。

一、徳を成し材を達するには、師恩友益多きに居る。故に君子は交遊を慎む。

一、死而後止の四字は、言簡にして義該し。堅忍果決、確乎として抜くべからざるものは、是を含きて術なきなり。

右、士規七則約して三端となす。曰く志を立て、萬事の源となし、交を擇びて仁義の行を輔

け、書を讀みて聖賢の訓を稽ふ。士、苟に此に得ることあらば、亦以て成人と爲すべし。

乃木大將は、同講演に於て、七ヶ條の簡單明瞭にして剴切なる解釋をなしてゐる。いまこゝに、その要旨を摘録して、大將の教育精神を知る助としたいと思ふ。

一、人には五倫といふものがある。就中、君臣父子に於ける忠孝が大切である。之の區別がなければ、人は禽獸と異ならぬ。

一、國體については、今日の學校にても教へつゝあるが、近來、社會主義などと云ふものがあるが、社會主義者を日本國の臣民として、生かして置くは恥辱である。これは誠忠義勇の足らざるによりて來る罪である。軍人は、ひとり戦時に、命を惜まずといふ計りではならぬ。無事の日は、國民の模範たらねばならぬ。第二のことは、封建の時代に在りては、大名武士に就いて云へることなれ共、今日にありては軍人の任務である。

三、武士道は將校の自ら任として、之に當るべきである。義の心薄いものは、士たるの價なきものである。ただ人情に外れざらんことを、是れ恐れて、交際上のみ細心注意したる

ものは、義を行ふことは出来ない。多少世間と異なる考慮がなければならぬ。廉恥の心は義の端であり、恥を知るは、勇に近き譯である。

四、質素に關しては、勅諭にもある通りである。質素は稍々もすれば、他の非謗を受け易く、吝嗇と同視せらるゝを以て、中庸を得ることに、深き研究を要する。質實を得ざるものは、公助正大なることは出来ぬ。とかく交際に流るゝときは、奢侈柔弱に陥り、費用が多くなる。従つて金錢を欲するに至る。然るときは、心中に惡意を萌し、物を貪り、他を欺くに至り、不當の借財を爲す恐れがある。これ即ち文飾に過ぐる弊たるものである。

五、道義を研究し、聖賢の道を守ることが肝要である。併し、聖賢の道は支那に限る如く考ふるは誤謬である。我國にも決して聖明の君主、忠誠賢良の臣子が少くない。

六、君子は、交友を慎むこと緊要である。學術徳義の上に就き、その人の長所を尊信し、交を結ぶを必要とする。その缺點のみを見て、遂に之を嫌ふときは、友なきに至る。己の節義に害あるものは、斷乎としてこれを絶ち、その止むを得ざる場合に於ても、その心を以て交り、又自ら他人の缺點を矯正するの力を備へねばならぬ。人を無闇に批難し、又職務上の妨害をなすが如きは、不心得の甚しきものである。

七、近頃、死して猶ほ止まずなどいふものがあるが、これは空にすぎぬ。抑も生ある内に、事を遂げ得ざるものが、死して事を遂ぐる筈はない。死する際まで、恥をかゝざるやうにすることこそ、望ましきことであると。

大將は、心に徹するまで、素行の中朝事實を愛讀翫味した。大將の忠誠の心志と、行動とは、またこれによるところが大であつた。中朝事實の掲載は、割愛するが、順序として、武教講義には、一寸觸れざるを得ない。大將は、父の手寫した武教講義を、十五歳の時讀んだのである。その開講主意には次のやうな文言がある。

「山鹿先師ノ武教全書ヲ開講スルコトハ何タル主意ナルソ。各々能ク考へ給へ。吾レモ人モ貴キ皇國ニ生レ、特ニ吾々ハ武門武士タル上ハ、其ノ職分ナル武道ヲ勤メ皇國ノ大恩ニ報ユベキハ論モ及ハヌコトナリ。然レトモ誰人モ職分ト國恩ヲ知ラヌ者ハナケレトモ、勤ムルモノト報ユル者トハ古今ニ亘リテ甚タ稀也。其ノ故由ヲ考フルニ勤ムルモ報ユルモ左迄六ヶ敷事ニハ非ス。唯道ヲ知ルト知ラヌトナリ。果シテ能ク道ヲ知ラハ誰カ勤メサラシヤ。誰カ報イサラシ

ヤ。サレハ道ヲ知ラントナラハ能々先師ノ教誡ヲ服膺シ給へ。……赤穂ノ遺臣亡君ノ仇ヲ復シタル始末ノ處置ヲ見テモ、大石良雄カ先師ニ學ヒ得タル所ヲ知ルヘシ。國恩ノ事ニ至リテハ、先師滿世ノ俗儒外國ヲ尊ミ我邦ヲ賤ム中ニ生レ、獨リ卓然トシテ異說ヲ排シ、上古神聖ノ道ヲ窮メ中朝事實ヲ選ハレタル深意ヲ考ヘテ知ルヘシ……」

乃木大將は、これより中朝事實に傾倒するやうになつたと思はれる。また武教小學序に、

「是レニテ士道モ國體モ其ノ梗概ヲ得ヘシ。先ツ士道ト云フハ無禮、無法、粗暴、狂悖ノ偏武ニテモ濟マス、記誦記章浮華文柔ニテモ濟マス、眞武眞文ヲ學ヒ身ヲ修メ心ヲ正シクシテ國ヲ治メテ天下ヲ平ニスルコト是士道也。國體ト云フハ神州ハ神州ノ體アリ異國ハ異國ノ體アリ、異國ノ書ヲ讀メハ兎角異ノ事ノミヲ善シト思ヒ、我國ヲハ却テ賤ミテ異國ヲ羨ム様ニ成リ行クコト學者ノ通患ニテ、是レ神州ノ體ハ異國ノ體ト異ナル譯ヲ知ラヌ故也。故ニ晦菴ノ小學ニテ前ニ云ヘル士道ハ大抵知レタレトモ、是レハ唐人ノ作りタル書ニエ、國體ヲ辯セスシテ遽ニ讀ムトキハ同シク異國ヲ羨ミ、我カ國體ヲ失フ様ニ成リ行クコトヲ免カレサルヲ先師深ク慮リ給

フ……」

そして武教小學は、夙起夜寢、燕居、言語、應對、行住坐臥、衣食居、財寶器物、飯食色欲、放鷹狩獵、與受、子孫教戒、總目錄の綱目によつて、構成されてゐる。その内容は、古今の史實に照らし、聖賢の教誨を引用して、武士たるものの心掛けを、しるしたものである。大將の言説行動を詳さにみるときは、その一言一行が、如何にこれに基いてゐたかを知り得るのである。

君子といひ、武士といふ範疇は、時代と共に異なるべきであらうが、その指導者たるの立場に於ては、なんら變るところはない。時局下の日本は、總力結集、舉國一致の時である。前線も銃後もない。劍をさげた人のみが武士ではない。武士的心構へは、各員各層に要請されてゐる。

大將は、素行と松陰によつて、國體の本義に徹した。克己と鍛鍊によつて、これを實踐躬行した。大將の教育精神は、こゝから生れて來たのである。大將の教

育方針は、この心構へを養成するにあつたのである。このことを承知した上で、更に先生乃木大將に移り度いと思ふのである。

明治四十一年四月、今上天皇陛下であらせらるゝ、第一皇孫殿下には、學習院初等科に御降學あそばされたのである。ついで、御二方の皇孫殿下も、御降學あそばされた。

大將は、御皇族方の教育については、細心の注意を拂つた。即ち初等科主任に命じて、次のやうな覺書を作成せしめた。

- 一、御健康を第一と心得べきこと。
- 二、御宜しからぬ御行狀を拜し奉る時は、之を御矯正申上ぐるに御遠慮あるまじきこと。
- 三、御成績については御斟酌然るべからざること。
- 四、御幼少より御勤勉の御習慣をつけ奉ること。

五、成るべく御質素に御育て申上ぐべきこと。

六、將來陸海の軍務につかせらるべきにつき、その御指導に注意すべきこと。等である。以て大將の教育精神を知り得る。ある日のことであつた。乃木大將は學習院初等科の表玄關の脇の處に、刀を左手に堅持して、儼然と立つてゐた。暫くすると、其處へ、天津日嗣であらせらるゝ第一皇孫殿下が、一日の業を終へさせ給うて、御歸りなさるのであつた。大將の數歩前に參らせ給ふや、御やさしき御手を舉げさせ給うて、恭しく敬禮を遊ばされた。大將は、師としての禮を受けた後に、赤心溢るゝばかりの態度と口調にて、

「尊師に對されました時は、心からの御敬禮の誠をつくされんことを、常に懇願致します」

と言上されたのであつた。

此の時、皇子様には、眞心をおこめあそばされて、再び恭しく擧手の敬禮を遊

ばされたとのことである。このときの乃木大將は、熱涙の滂沱として流れおつるを禁じ得なかつたのである。洵に、純誠至心の涙でぬる。今や門外に進ませ給ふ皇子様の御後姿を御送りする態度は、正に合掌せんばかりに、おろがみ奉る様子であつた。

はるかに、これを拜した生徒一同も、至純至情の師弟尊愛の發露に、自ら嗚咽を催したのであつた。

師の謹嚴なる言葉、これを素直に聽き上げ給ふ皇子様、臣下として口になし難きを忍んで言上する無雜赤心の人、志士仁人、大將の態度は、私共學にあるもの、以て龜鑑となすべきであらう。

また大將は、ある場所で、御付添武官の參謀飾緒を、御興味ありげに、もて遊ばされてゐらるゝところを拜した。大將は直ちに、

「これは軍人の威嚴ある制服で御座います。みだりに、おもて遊ばさすもので

は御座いませぬ」

と御注意申上げたこともあつた。大將の教育は、實に凜烈たるものであつたのである。

大將は、生徒に對して口癖のやうに、眼の大切であることを注意した。

「凡そ人の價値は眼にあり、凡夫と愚夫と賢人とは、一目その眸子を見て分る。たとへ、凡愚にあらざる人でも、事をなすにあたつて、着眼の定まらぬのは、その事に熱心の程を缺き、そのことを等閑にしてをる證據である。之に反して、たとへ其の人は愚でも、ちやんと眼の着け處を定めて、心をこめてしてゐたならば、遂には其の人は賢しく、えらく、成功するものである。人に馬鹿にされるのも、褒められるのも、又は仕事を早く成績よく仕上げるのも、永くかゝつて不成績に終るのも、皆その人の眼つき如何によつて、初めからわかるのである。故に人は眼の着けどころ、着眼といふことが最も大切な事である。殊に敵を眼前に控へて、

寸毫も油断の出来ぬ此の撃劍に於ては、尙更以て此の注意をせねばならぬ。目ばかり一つは、其處に一つの隙を生じて大負傷の基ともなり、命を棄つる因ともなるのであるから、十分に氣をつけて油断のない様にせねばならない。又今一つ大切なことは、下腹部にうんと力を入れることである。下腹部に力の入つてゐない人は、進むにも退くにも、體の中心がとれないで、心に確とした落着きといふものがない。即ち肝玉がすわつてゐないから、隙が出来て直ちに敵に乗せられる。之は單に劍道ばかりでなく、何事についても必要な事だから、最も注意せねばならぬ……」

と着眼の必要をといてゐる。

孟子も、人に存する者は、眸子より良きは莫しといつてゐる。眸子は、其の惡を掩ふことは出来ない。胸中が正しければ、則ち眸子も亦瞭らかであり、胸中が正しからざれば、眸子も眩いものである。其の言を聞いて、その眸子を顧れば、

夫焉んで庾さんや。大抵その人物は分るものであると云つてゐるが、實に至言であると思ふ。

小笠原長生子は、大將の思想の中心は、相對調和にあるとなしてゐる。喩へば國家と個人との調和、理想と實際との調和、理性と情宜との調和となつて顯はれてゐるといつてゐる。大將は、一面に於ては、實に温い慈悲深い方であつたが、また一面に於ては、大義名分、或は信義等のことについては、非常に嚴格で、苟も之に反するやうなことは、決して容捨しなかつた。これも一つの相對調和である。また總ての事について、大將の觀察は常人の觀察よりは、必ず一段と深いところに着眼せられる。例へば、こゝに一人の不心得なことをしたものがあつたらう。吾々は直ちに、其の人を憎む者と評し去つて仕舞ふ場合が多いが、大將は、アア待ちなさい。まづ之を憎む前に、どうして此の者が斯ういふ心になつたかといふことを、周到に考へてやるがよろしい。尤も事柄にもよるが、出來得べくん

ば、何とかして之を善人になるやうに、指導してやり度いとの觀念を持つ程に仁慈の心が、人の上に立つには必要であるといふのが、大將の心で、その慈悲は、殆んど神佛にも等しいと述べてゐる。

大將の思想性格の中心を、相對調和にあるとなしたのは、蓋し適評であると思ふのである。大將の教育精神は、またこの相對調和の具體的表現であつたといへよう。

大將が、好んで直接指導したのは、劍道である。一刀流免許の腕前であつた大將は、容赦なく猛稽古をつけた。いやしくも武術を輕んずる氣風のある學生、または辟易尻込みをする學生を見付けると、劍道は見世物ではない、出て來いと、否應なく引張り出して、へト／＼になるまで稽古をつけるのであつた。併し一面に於て、恭しく學生に詫び入ることもあつた。ある日の稽古に於て、一少年の相手となつてゐたが、知らず識らずの間に、心勵み氣が發して、遂誤つて、相手の

臂をしたたか撃つたことがあつた。固より演武中のことであるから、少年は痛さを忍んで色には表はさなかつたが、やがて稽古が終ると、大將は少年の前に立ち自己の粗忽を真から詫びるのであつた。そして最後に、院長が臂をうつたなどと御父様に言ひつけて呉れるなよと、いはるゝ程の無限の愛嬌の保持者であつた。

大將は、學生の食事については、常に注意してゐたが、こゝにも逸事がある。明治四十五年のことである。新一年生が入寮したので、翌朝の食事に大將は列席した。その時、副寮長は學生に向つて、生卵子を好まぬ者は、手を挙げよと尋ねた。寮では食事に卵子をつけるとき、生卵子の嫌ひな學生には、茹でて與へる定めになつてゐたので、前例によつて質問したのである。

大將は、學生が正に手を挙げようとする刹那、立ち上つて大喝一聲した。

「生卵子が食べられないのか。生卵子が食べられない様なれば、食べずに置くがよい。だが、この中には、そんな懦弱な者は一人も居らぬだらう。居るなら手

をあげてみよ」と。

副寮長も最早調べることも出来ず、學生も亦、手をあげるものがなかつた。後で調べてみると、嫌ひの者も若干名あつたが、その日から食べる様になつたとのことである。

教育は、この機を捉へ、機を制することが肝要である。このことは、無雜無欲の人にしてはじめて、よく行ひ得るところであらう。

ある學生演説會の日のことであつた。大將は、微笑をたゞへつゝ極めて面白く而も眞面目に學生の所論を、聴取してゐた。ところが、壇上に立つた某生が、論じて校規を云々するところがあつた。院長は一喝した。

「コラ、何某、さう云ふことを述べることは許さぬぞ。意見があるならば、後で自分が聞かう」と。

學生は辟易して、「然らば他の事を陳べます」とあやまると、院長は、「校規

以外のこと柄ならば許す」とのことでもさまつた。

翌日、その學生はおそろしく院長に陳謝に行つた。院長は慈顔以て之を迎へて、いや別に詫びに来るに及ばなかつた。然し今後は、校規等の問題はあのやうなところで言つてはならぬ。若し他の學生が思ひ違ひでもするやうなことがあると、學校ではあれ丈の人数を集めて、その誤りであることを説かねばならぬ。學校のことについて熱心なのはよい。然し若し、自分に考へがあつたなら、直接なり、或は保護者なりを介して、先生又は院長に申出るがよい。それで聞かれなかつたならば、それは屁理窟といふものであると、誠めたのであつた。

乃木大將の學習院長就任の目的は、柔弱、華美、無規律、虚偽、強辯等の生半可な貴公子然とした弊風を、一掃するにあつた。これに代へて、糞土を掬せざれば善農となる能はず。筋脈を断たざれば善工となる能はず。肩背を傷らざれば善賈となる能はず。死地を踏まざれば善士となる能はずとの、松陰の四良訣の精神